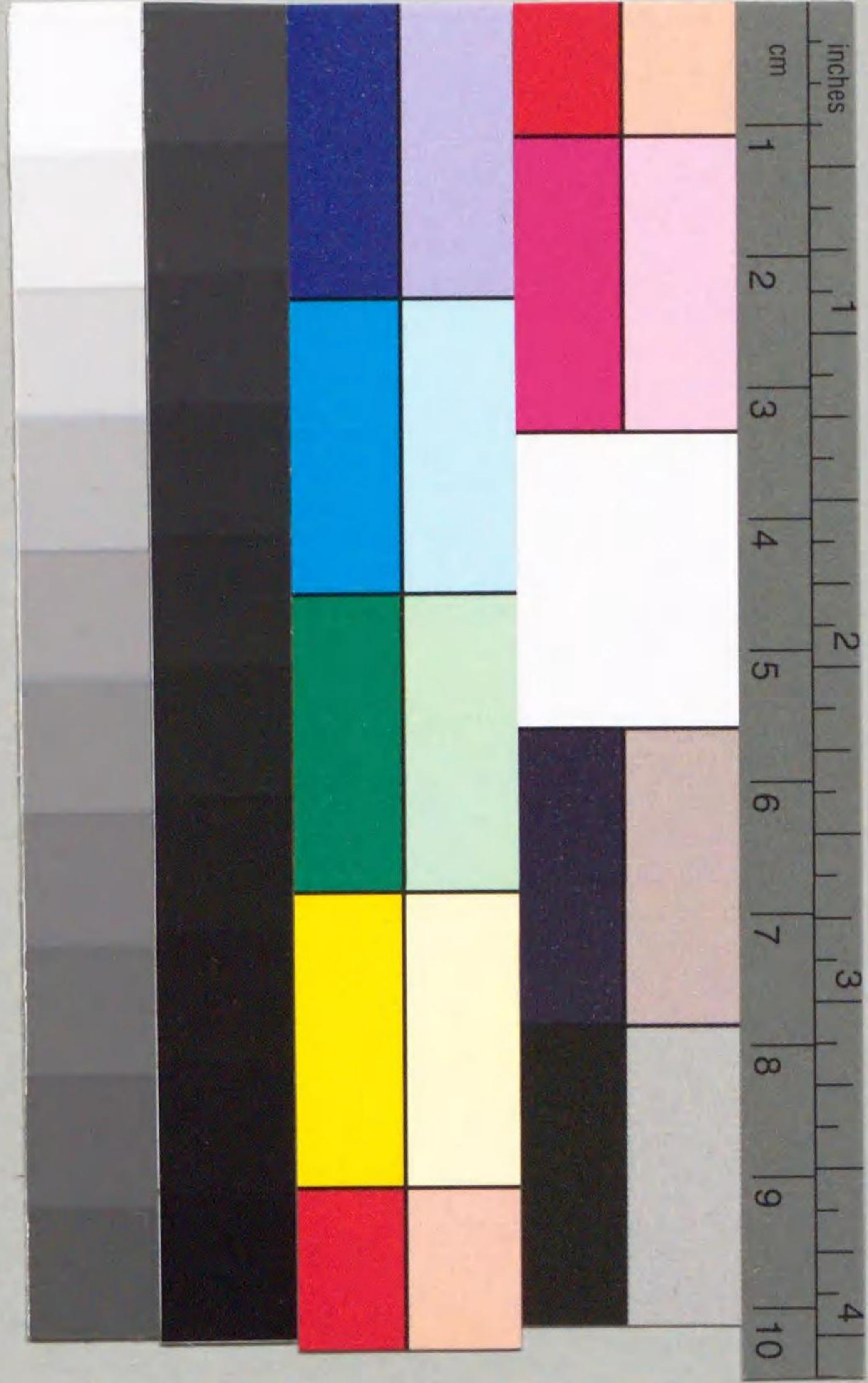
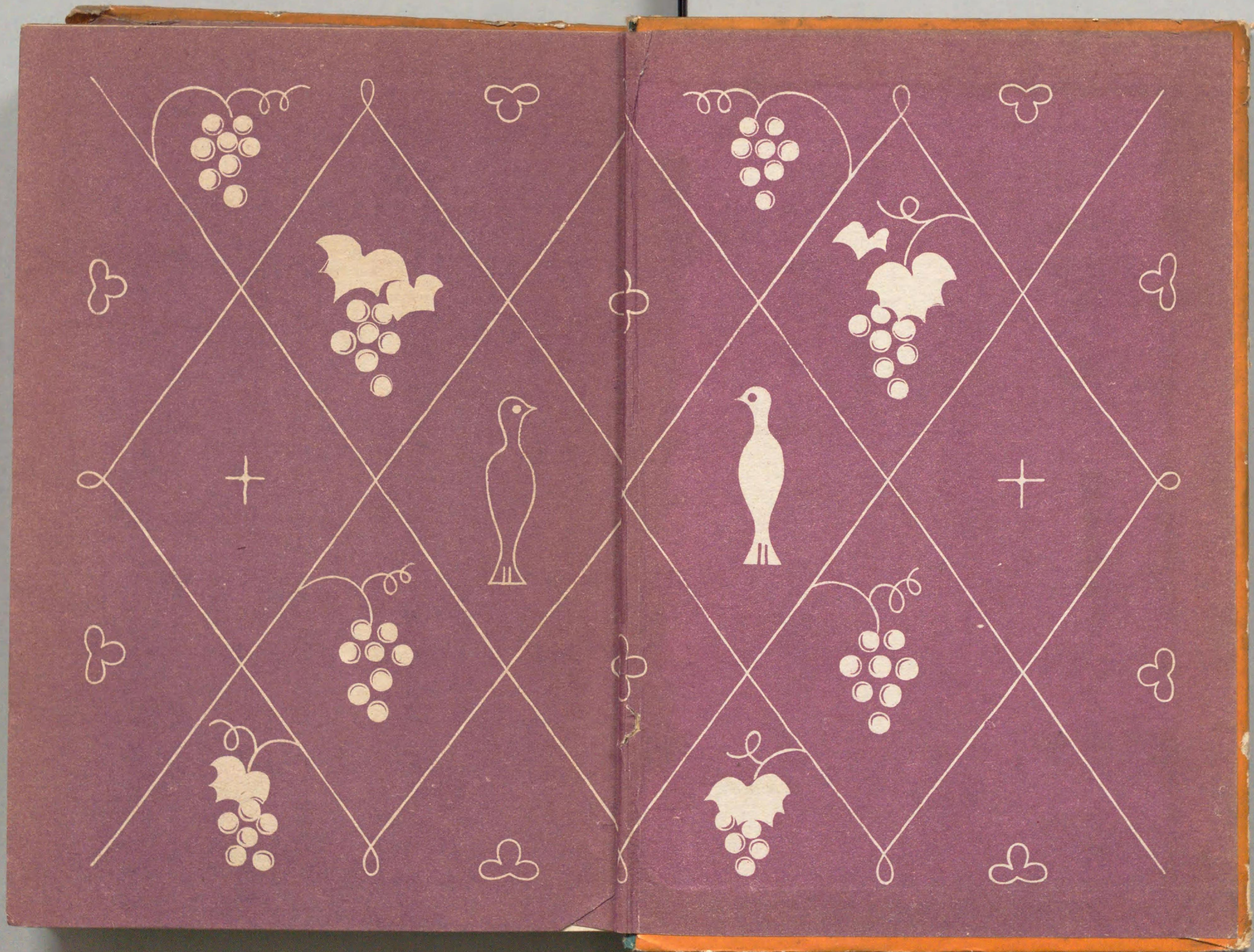


952  
~~200~~  
200



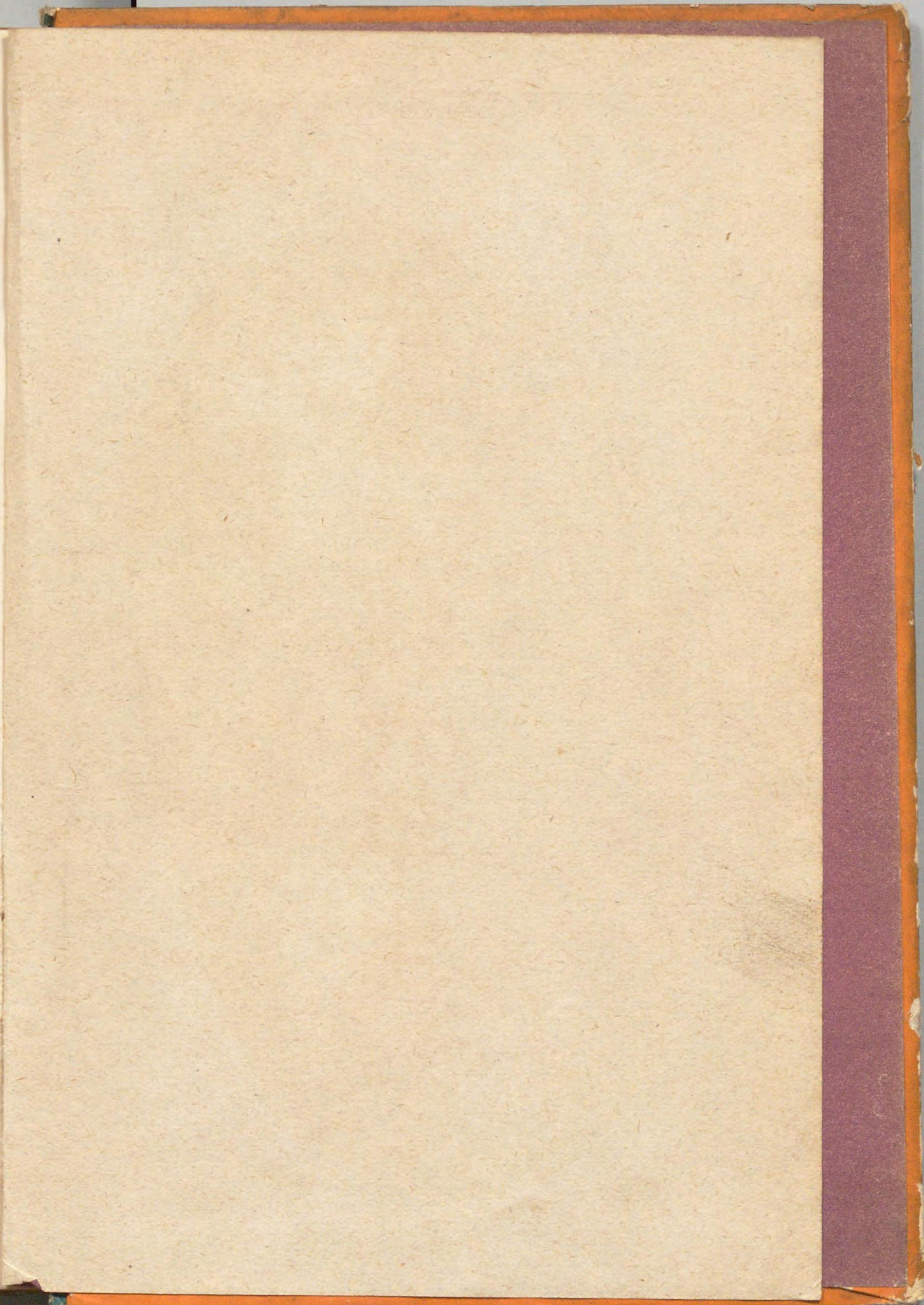




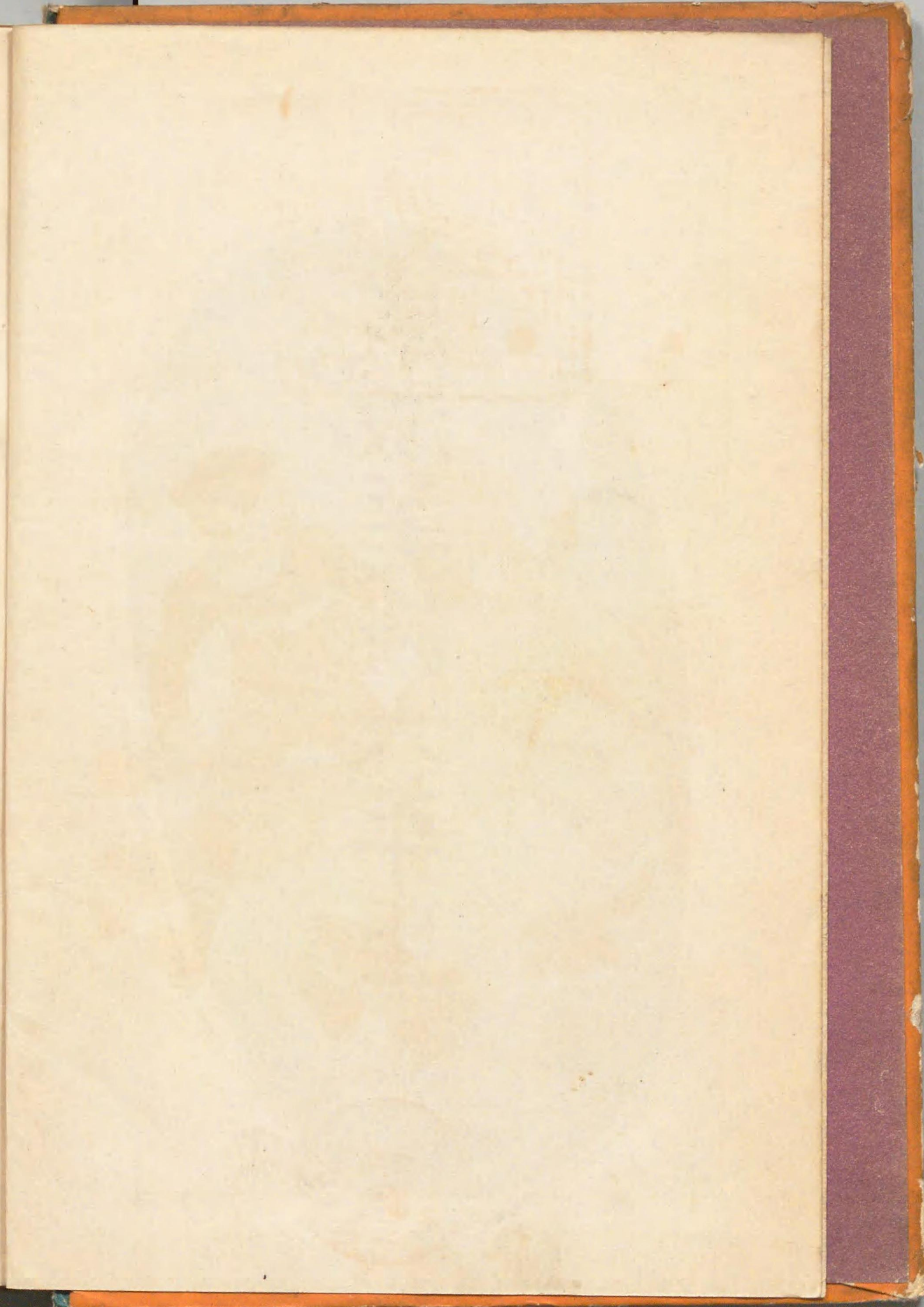




感激美談六年生









952  
200

# 感激美談六年生日次

栄	光	涙	あり	.....	一					
空	は	晴	れたり	.....	二〇					
輝	く	勝	利	.....	四					
紅	顔	決	死	隊	.....	六七				
眞	心	の	大	時	計	.....	九			
街	の	英	雄	.....	.....	一〇〇				
梅	干	先生	と	海	軍	大	尉	.....	一一	
尊	い	かな	母	の	愛	.....	.....	.....	一三九	
輝	く	友	情	.....	.....	.....	.....	.....	一四六	
善	行	は	か	く	れ	ず	.....	.....	.....	一五五



目次	愛の學校	一六三
	愛の強し	一八七
	勇敢な少年傳令	二一〇

感激美談六年生 目次 (終)

感激美談六年生

榮光涙あり

強敵の師

「あッ！あぶない！」  
 時岡兄妹が思はず大聲にさげんだ時、自動車はググツと前のめりに急停車した  
 だが、間一髪、道を横ぎらうとして出てきた人影は、四五メートルもはねとばさ  
 れてゐた。

『しまった！』

運轉手も時岡兄妹も、あはたゞしく自動車を飛び出した。

『もし〜！』

運轉手は人影の上へかざみこんで、その耳もとへ大聲にどなつたがたゞうめく

りあ涙光榮



23

ばかりで返事はない。

『早く病院へ！』

和子はうはすつた聲で、運轉手と春夫をうながしたてた。だが春夫は、『うむ。』

といったきり、やはりだまつて立つてゐる。なんとかしてかゝり合ひにならなければいいかとそればかり考へてゐるのだ。

『お客さんすみませんがちよつと手をかして下さい。』

さうたのまれてみると、さすが春夫もいやといふわけにはいかなかった。

病院はそこからあまり遠くないところにあつたその一室のあかるい電燈の下へ

はこびこんで見ると、はね飛ばされた男は、品のいい白髪の老人だつた。

『皆さん、どうもお手数をかけます。運轉手さん、警察へはとゞけんで下さい。

いなか者の不注意からおこつたあやまちです。あなたのせむぢやない。』

應急の手當をうけて病室へ横たはつた老人は、さういつて心配顔の運轉手を見

た。

『はアですが。……』

『いや、この分なら、けがもたいしたことはありませんまい。皆さん、夜もふけま

すからどうぞもう御心配なくお引きとり下さい。』

と老人はなほも、運轉手から春夫たちへ眼をうつしたが、誰も動かうとはしな

かつた。

しかし、その實、春夫はさつきから、一刻も早くその場をぬけ出したくてうづ

くしてゐるのだ。

『お家の方へおしらせしなくてもいゝでせうか？』

和子が心配さうにさうきいた。

『家ですか、わしは九州のゐなから今日上京してきた者です。東京には身よ

りもなにもありませんが、……さよう、實はわしの小學校の教へ子が、一人こつ

ちへきてをります。これが明日、全國中等學校水泳大會へ選手として出ますの



で、その見物にはるく、上京してきましたんぢや。』

『なんていふ人ですか、その選手は？』

それまでだまつてゐた春夫が、急にそばからさう口をはさんだ。實は春夫も明日明治神宮プールで行はれる水泳選手権大會に出場する選手の一人だつた。

『はい、水島市造といつて、まだ今年中學へ入つたばかりの者ですよ。あれはわしがはじめて手をとつて泳ぎを教へた奴でしてな。去年の九州の小學校水泳大會には、小學生としての新記録をつくりよりましたぢや。今度もわしにぜひ見物にこい、わしの應援さへあれば必ず勝つといふもんで。……』

老人は途中までいひかけて、フツと顔をくもらすと、

『水島は心配してゐるかも知れません。しかし、わしがけがをしたと知れば、なほ心配するでせうし。……』

と考へこんでしまつた。

その様子をチツと見まもつてゐた和子は、

『兄さん、ちよつと。』

と小聲でいつて、春夫を廊下へさそひ出した。

『兄さん、水島さんて知つてゐるの？』

『知つてゐるとも、佐賀中學の選手で、一年生だけど明日の強敵だよ。』

春夫がいきほこんでいつたとほり、明日の百メートル自由型決勝は、豫選の成績からいつて、水島と春夫との一着あらしひを豫想されてゐた。

『しらせてあげたらどう、この先生のきてゐることだけでも。』

『馬鹿！僕等にそんな義務があるか、試合前の夜ふかしは大禁物だ。僕はかへる。』

春夫は何が氣に入らないのか、頭から和子をどなりつけると、荒々しく玄關の方へ遠ざかつていつた。

意外な知らせ



東京驛の大時計は、ピタリと十時をさした。

夕方のまだ明るいうちから、チツと立ちづめにそこへたづんだまゝの市造はもう足の感じさへ失つてゐた。

コンヤツク オンチ

恩地先生からの電話には、たしかにさうあるのだが、九時三十五分の最終上り列車がついてしまつても、なつかしい老先生の姿は市造の前へあらはれなかつた。

合宿の旅館へは八時までにかへるやう、監督の先生からいひわたされてゐるしそれを二時間も過ぎてゐるのだから、それ以上あてもなく待つわけにはいかなかつた。

『をかしいなア。』

市造はさうつぶやきながら、今にも泣き出したい氣持でシヨンボリと驛を出た。恩地先生は市造にとつて、郷里の小學校での六年間を、そのあたたかい教への

手でみちびき育てゝくれた恩師である。その上、幼いころ初めて水泳の手ほどきをしてくれた先生は、市造の出る試合といふ試合には欠かさず見物に来てくれたものだった。

また市造は市造で、恩地先生の顔を見物人の中に発見すると、ふしぎに勇氣があふれてきて、いつでも必ず優勝することが出来るのだ。

『こん度は全國の猛者を相手にするのぢやから、しつかりやれよ。東京ぢやからといつて氣おくれするなよ。わしも必ずいくからな。』

さういつて。心をこめてはげましてくれた恩地先生の言葉が、まだハツキリと市造の耳にのこつてゐる。

ところが、大事な決勝を明日にひかへた今夜、力とたのむ先生は影も形も見せないのである。市造が心ぼそさに泣きたくなるのもむりはなかつた。

合宿は明治神宮外苑の青年會館だった。市造がそこへかへりついたのは、それから三十分もしてからだったらうか。



『あのちよつとおたづねしますが、……』

市造が玄關を入らうとした時、突然さう問ひかけた少女がある。

『はア。』

市造はそれが見知らぬ都會風の女學生なので、思はずドギマギと顔を赤くした。

『九州から中等學校水泳大會へ来ていらつしやる方で、水島さんて方御存知でせうか？』

『水島は僕ですが、……』

市造はなほめんくらつた。

『まア！』

こん度は少女の方が、驚いてマヂ／＼と市造を見つめたが、

『あの、恩地先生からおことづけですの。』

『えッ、恩地先生！ 今どこにゐらつしやるんです。』

『お所はなんともおつしやいなせんでしたが、今日こつちへおつきになりました』

から、明日は安心しておた／＼かひになるやうにとのことですわ。』

『で、あなたはどなたなんです？』

市造がせきこんでたづねると、少女はためらつてから、

『わたし、時岡春夫の妹で和子つていひますの。ではおそくなりますから、……』

と頭を下げると、あつけにとられて立ちすくんでゐる市造を残してさつさと外へ出ていつてしまつた。

まだ中學三年でありながら、中等學校水泳界の覇者として鳴らしてゐる時岡春夫の名は、市造もよく知つてゐた。いや、知つてゐるところか、明日の百メートル決勝で、時岡は市造の最大の敵なのだ。だが、その妹だといふ今の少女が、どうして恩地先生を知つてゐるのだらうか？。

『ちよつと、ちよつと待つて下さい！』

市造があはて、後を追ひかけた時は、もうどこにも少女の姿は見へなかつた。



### 最後のコース

全國中等學校水上選手權大會が、神宮外苑プールで開催された当日は、初秋の空がクツキリすみわたつたスポーツ日和だつた。

競技開始前から續々とつめかけ観衆は、三方のスタンドをまたゝく間に埋めつくして、一と競技ごとにすさまじい熱狂の嵐をまきおこした。かうしてプログラムは順序よくすすめられ、やがてこの日の呼物百メートル自由型決勝が行はれるころには、見物の熱狂も正にその頂點に達してゐた。

選手たちは赤銅色のたくましい膚を陽にかざやかしながら、もうそれ〴〵のコースに立つてゐた。

市造も監督の先生や同窓選手たちにはげまされて自分のコースについていたが、なぜかいつものあふれるやうな勇氣が湧いて來ない。たゞ落つきなく見物席を見まはすばかりだ。

昨夜上京したのはづの恩地先生の消息が、まだ全くわからないのである。

『出場選手諸君の名をコース順に申し上げます。』  
場内アナンスが、擴聲機からながれはじめた。

『一のコース、茨城の中山伸二君、二のコース、佐賀の水島市造君、三のコース、東京の時岡春夫君、四のコース、……』

市造は今さらのやうにハツとして、隣のコーンへ眼をうつした。そこには十分の落つきを見せて、見物席の方を向きながら立つてゐるのは、昨夜合宿へ市造をたづねてきた少女の兄時岡春夫だつた。

『ちよつとおたづねしますが、恩地先生は、……』  
と喉まで出かゝつてくる言葉を、市造はグツとこらへなければならなかつた。

今はもう競技直前だ、選手同志の話はゆるされない。  
審判官も記録係も、各々の位置についた。見物もかたづをのんで、嵐の前の静けさが不氣味に場内へひろがつていつた。



そして、いよいよ競技開始の時はきた。

『用意！』

今はもうためらつてはゐられない。市造は精神を統一しようとおせりながら、腰を落して水面をにらんだ。

ダーン！

スタートのピストルがひびくよと見る間に市造は水しぶきの中へ身をおどらせた。

先頭時岡、それに少しおくれて三人が平行し、出足のおくれた市造はいちばんしんがりだ。

十メートル、十五メートル、二十メートル、——時岡依然として先頭、次は茨城の中山が、四のコース、五のコースの選手をぬいてグン／＼出はじめた。

『時岡！ 時岡！』

見物人の破れるやうな聲援、地元の時岡が断然優勢なのだ。

やがて三十メートル、——五十メートルの引かへしはもうすぐだ。

『時岡！ 新記録をだせッ！』

そんなさけび聲が、市造の耳へも入つた。

『いけない！ こんなことで皆にすむか！ 恩地先生に申しわけが立つか！』

市造はハツと氣を引きしめると、猛然と頑ばりはじめた。

出る！ 出る！ 三メートル、二メートル、一メートル、また／＼間に二人を

ぬいて、第二位の中山へせまつた。だが、中山との差はまだ三メートル、先頭の

時岡からは七メートルも引はなされてゐる。

そのまゝで五十メートルの引返しがきた。

『なにくそッ！』

市造はもう夢中だ。力泳又力泳、あますところ四十メートルの邊でやうやく二位の中山を追ひ抜いた。

だがむりな頑ばり方をしてゐる市造は、すぐつかれてしまった。手も足もしび



れたやうに感じがなくなり、呼吸も目茶々にみだれてきた。

あと三十メートル、二十五メートル、ああ、時岡はもう二十メートルでゴールだ。彼の一着はもう疑ひもない。

市造は力つきて、ふと水面へ顔をあげたそのとたん、まつ正面の見物席の柵から、身体を半分のみ出すやうにして、

「水島！ 水島！」

聲をかざりにさけんでゐる姿！ 頭にま新しい縋帯をまきつけてこそゐるが、

ああそれは疑ひもなく恩地先生ではないか！

しかもその横には、時岡の妹だといふ昨夜の少女が、先生をさへへるやうに附添てゐるのだ

「水島！ 勝つてくれ！」

恩地先生はあえぐやうにさけんだと見る

間に、柵をすべつてドツと横にたふれた。



「あッ、先……」

市造は思はず聲をあげやうとして水

にむせたが、次の瞬間自分でもわ

けのわけのわからぬ勇氣があふ

れてきた、勢すさまじくゴー

ルへ突進しはじめた。

もう勝ち負けのことな

どは市造の頭になかつた。

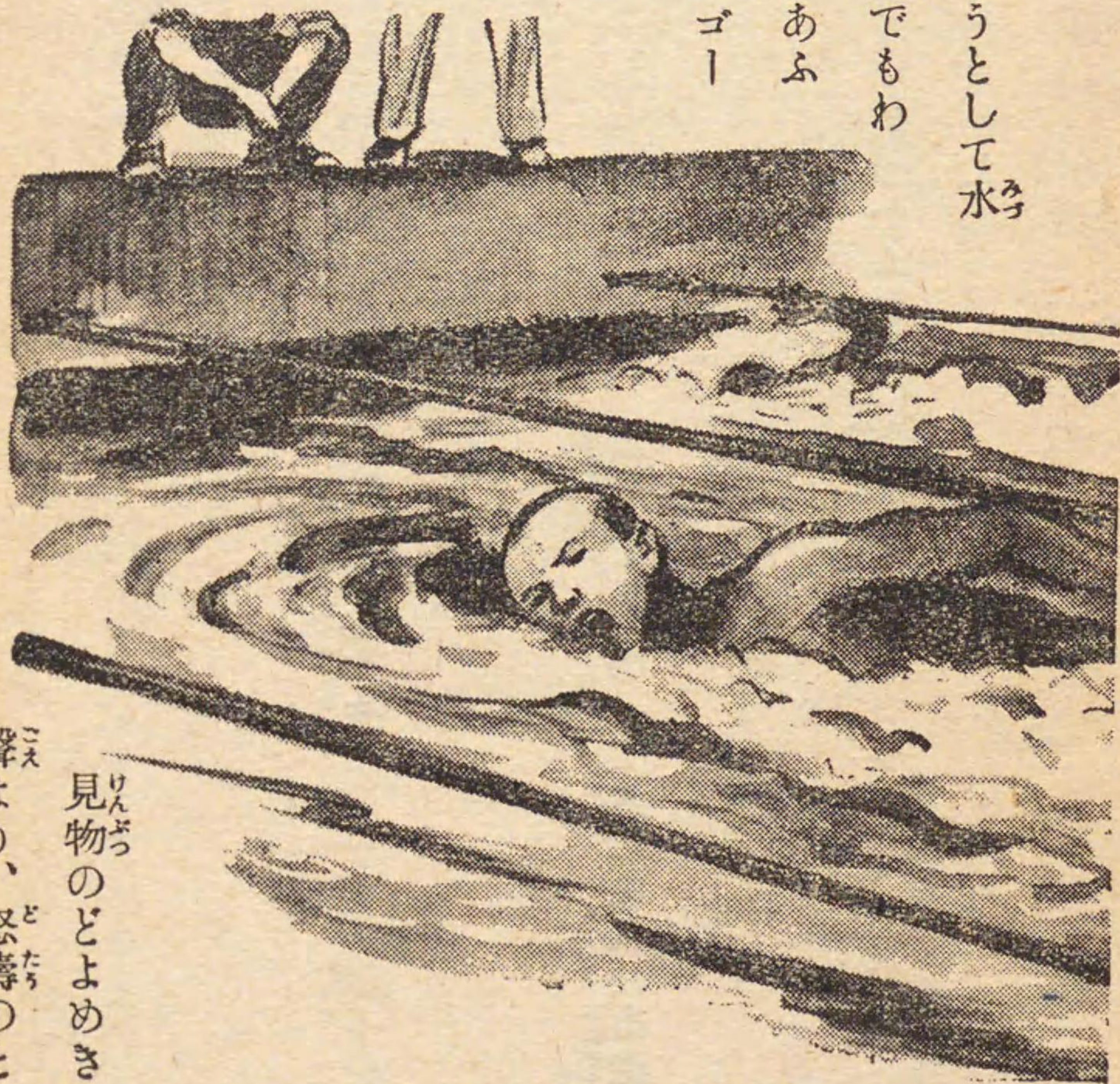
たゞ一秒も早くたふれた

恩師のそばへかけつけた

かつかのた。

ワーツ、ワーツといふ

それはもう、人のさけび



見物のどよめき  
聲より、怒濤のと



どろきに近かつた。

固い握手

「先生！ 恩地先生！」

市造がさうさけんでころがるやうにかけつけた時、恩地先生はちやうど和子や周囲の人たちにたすけおこされたところだつた。

「おう、水島、よくたゝかつた！」

先生は苦しきうに柵へもたれかゝりながら、右手をさしのべて水にぬれた市造の腕をしつかりとつかんだ。

「先生大丈夫ですか？」

市造は息をはづませながら、氣づかふやうに先生の姿を見つめたが、

「その繃帯は、繃帯はどうなさつたんです！」

「これはなんでもない。それより水島、一着か二着か？」

「だめです、時岡君が一着でせう。同じぐらいにゴールへ入つたんですけど、……」

市造にとつてもうそんなことはどうでもよかつた。それに、ふと見ると、先生は着物の下の胸にも、繃帯をのぞかせてゐるのだ。

「けがをなさつたのですか？ 先生、そ、それはどうしんです！」

「水島君、それは僕から話します。」

ふいに後でさういふ聲がしたので、市造がハツと驚いてふりむくと、そこにやはりプールから上つたばかりの時岡が立つてゐた。

「實は、先生は昨夜僕の自動車だけをされたのです。」

「えッ！」

市造は息もつまるおもひで恩地先生を見まもつた。

「それで、それをなによりも先に、君にしらせなければならなかつたんですが、ひけうな僕はほつたらかしてかへつてしまつたんですが、僕はいま、先生が



こんな大げがまでされてゐるのに、君の應援にこられてゐるのを見て、今までの自分のいやしかつたことがよくわかりました。僕は、君にも先生にも、おわびのしようがありません。それから和子お前にもすまなかつた。』  
春夫は次第に涙聲になりながらしまひには三人の前にガクリと首をたれてしまつた。

『兄さん、わたし、わたしこそ昨夜はごめんなさい。』

和子はハンカチを眼におしあて、思ひがけない兄の言葉に、こみあげてくるうれし涙をおさへた。

とその時場内アナンスが高らかに擴聲機からながれた。

『たゝ今の百メートル自由型決勝の結果を申しあげます。第一着、佐賀の水島市造君記録は五十九秒三、これは當大會の新記録であります。』

しばらくしづまりかへつてゐた見物席が、ふたゝび破れるやうな歡聲と拍手にかきみだれたが、それが終らぬうちに、

『第二着、東京の時岡春夫君、記録は五十九秒八、一着の水島君とはわづか十分の五秒の差で、これも當大會としては新記録であります。』

見物のどよめきはまたもたかまつた。

『時岡さん、勝敗は時の運ぢや、さ、これからは水島とも仲よくしてやつて下さい。』

恩地先生は片手に市造の腕を、とらへ片手に春夫の腕とらへると二人の手と手をしつかりと握りあはさせた。

二人は感激の涙をかくすやうに顔をそむけながら、しかし、かたい握手をいつまでもつゞけてゐた。

その後、市造と春夫はともに、中等學校水泳界の兩雄としてならび立つてゐたが、昭和十二年四月、春夫は早稻田大學へ入學して水泳部の新進氣鋭とうたはれ市造はいよく中等學校水泳界の第一人者として重きをなしてゐる。



恩地先生は今では小學校訓導の職をしりぞき、郷里佐賀縣藤津郡の片田舎に、しづかな老後をおくつてゐるが、いまだに市造が競泳に出る時は佐賀市まで老体をはこんでくるといふ。

(をはり)

# 空は晴れたり

## 母ひとり子ひとり

『なあ、お母さんぼくこの家をひっこしたいと思ふんだがねえ。』

床の中かな突然健作がいつた。

彼は小學校の先生で、二、三日前から風邪で休んでゐるのだつた。

陽の一ぱい射しこんる椽側で、お針仕事をしてゐた母は、不審さうに眼鏡を外して、息子の方をみた。

『藤井さんの奥さんが、妙なことをいつてるさうだよ。』

『奥さんが？』

うなづいて、母は微笑した。もうそれだけで、大凡のことは察したらしい。

町役場の書記をしてゐた父が、腦溢血でポツクリ亡くなり、大學を中途でやめた健作が故郷に歸つて、町長藤井良介の世話で小學校の先生になつたのは、去年の春だ。

年の春だ。

母子ふたりきりの平和な生活だつた。

藤井は親切な男で健作母子の面倒をよくみてくれた。今の家にしても、家作をたゞのやうな家賃でかしてくれた。それは、健作の亡父との關係があるばかりでなく、愛嬢文子の指導を、健作に頼みたいからでもあつた。

文子は五年生で、健作の受持ちだつた。後妻の子で、わがまゝ一ぱいに育つた彼女は手のつけられぬ不良兒だつた。頭はかなりいゝのだが、勉強しないから、成績が悪い。それを文子の母は、自分の子が悪いとは思はず、



『お家賃をはらはないのを、當然のやうに思つてゐるんですからね。恩を知らない人にはこまつたものです。』

と他人にもらしたといふことを健作はよそからきいたのだつた。

『勉強をみてもらひたかつたら、家へよこしたらいゝのに。三味線なんか習はしてゐるんだから。ぼくは文子の家庭教師ぢやないからね。とにかく藤井さんの世話になるのはももいやだ。どこか移りませう。』

『移るにしても、藤井さんが満洲からお歸りになつてからがいゝよ。かどのたゝないやうによくお話をしてね。奥さんとちがつて、藤井さんは、短氣なお方だけど、根はごくいゝ人なんだから。』

その時、表の方が急に騒がしくなつた。家の前を大勢の人が走つてゆく。

『なんだらう？』

母子が不安さうに顔を見合した時、ガラガナツと表戸があいて、五年生の正太といふ子供がいきなり飛びこんできた。

『先生！ 先生！』

『どうした、正太？』

『藤井文子が、自轉車にのつて濠に落ちました！』

### 義母にかくれて

文子は、母にかつてもらつた自轉車の練習中、あやまつて濠に落ちたのである。道路から水面まで十米もある濠だ。水深は五六米あり、しかも底無しの深い泥。

濠端にはもう大勢の人が集つてゐた。数名の若者が、警官の指揮で、必死の捜査をつゞけてゐる。

何事か叫びながら、半狂亂の藤井夫人の姿が、痛々しく人々の眼にうつつた。その傍に腫の大きい美しい娘が、青ざめて立つてゐる。先妻の子の秋子だ文子が練習してゐる時、そばについてゐたのである。



『駄目だ！ 潜水夫を入れなきや駄目だ！』

今しも水面に顔を出した若者が、絶望したやうに首を振った。

藤井夫人は聲高く泣き出した。

その時、健作が駆けつけた。

『先生が来た！ 先生が来た！』

子供たちはワーツと歓聲をあげた。先生の中で、一番若い、一番亂暴な健作が

どうしてか一番子供たちに人気があつた。

健作は素早く裸になつて、濠端へ下りて行つた。見事に發達した、たくましい

軀が人々の眼に頼もしい。

『こゝですか？』

搜索してゐた若者たちは

『先生ひとつ頼みませう。』

といひながら、おれたちにわからぬえものが、お前に出來てたまるもんかと、

いふやうな眼付で健作を見てゐた。

健作は水際に立つて、胸一ぱい息をすひこんだ。かつて早大の水泳部で鳴らし

た猛者、水には自信がある。

水煙りをあげて、水底深く飛びこんだ。

十秒……二十秒……三十秒……。健作はポカリ浮き上つた。失望の溜息があち

こちに起つた。それにはかまはず、大きく息を吸ひこむと、またブク／＼沈んで

行つた。

異様な緊張した十秒ばかりすぎた時、なんともいひやうのない歡喜の聲が人々

の間からあがつた。

文子のからだを横抱きにして、健作が浮きあがつたのである。

文子はすぐ病院にはこぼれた。落ちた瞬間、氣絶したので、水はほとんどのん

でゐなかつた。それでも健作の手がもう少しおそかつたら、絶望だつたと醫師は

話した。



健作は文子の命の恩人である。その健作に對して、藤井夫人は顔もださず、出入りの魚屋の主人にいひつけて、禮をのべさせたきりであつた。

『わたし、御挨拶。』



拶に

伺ひたいん

ですけ。』

どあまりな義母

の仕打に、みか

ねて秋子がさういふと

『どうぞ御随意になさ

いませ。』

『あら、何故ですの、お母さま？』

『秋さん、これからもう少し文子をいたはつて下さいね。あんな危い濠端へなぞ

わざくつれていかなくともいゝでせしよ。』

さすがに秋子は顔色をかへた。

『それはちがひますわ。お母さまわたしいくらとめても文さんはきかなかつたの

よ。』

『文子はさういつてゐません。まあくすんだことは仕方ないが、これから氣を

つけて下さいね。』

秋子の眼には一ぱい涙がたまつてゐた。

翌朝、義母が病院へ行つた留守に、秋子はそつと健作の家を訪れた。やはり濠

端の古い土塀にかこまれた、質素な家である。

健作は風邪をひいてゐたところを、寒中の冷たい水につつたため、四十度近



い熱だつた。それでも元氣に床の上に起き直つて、秋子を迎へた。  
ていねいに昨日の禮をのべて、それとなしに義母の失禮をわびる秋子を、健作は手をふつておさへた。

『なんでもありません。と、文子さんはあと四五日で退院できるんですか。よかつたですねえ。文子はぼくの可愛い教へ子だ。禮もくそもあるんですか。あなたは何も心配しないで下さい。ハ、ハ、ハ。』

快活な笑聲をきいて、秋子はホツとした。まだ若いけれど、本當にしつかりした方だ。いまの言葉を母義にきかしたら何と思ふだらう。

『お嬢さんも大へんですねえ。』

お茶をはこんできた母が慰めるやうにいつた。

『あたしはいつも伴に話してるんですよ。あなたはほんとによくできた方だつて。』

『そんなことありませんわ。』

秋子は眞赫になつた。

『でも、お若いうちの苦勞はあとになつてためになりますからね。元氣でおやり遊ばせ。そのうちにはいゝことがありますから。』

こんなお優しいお母さまをもたれた先生は伴せだと、秋子は自分の身にひきくらべて、健作が羨しくなつた。

歸らうとすると、母はしきりにとめた。しかし、義母が病院から歸るとうるさいので秋子は暇をつげた。母は名残惜しげに、

『さうですか。ぢや、又いらつしやいませね。お待してるますよ。』

心づかひ

健作の風邪はまもなく全快したが、こんどは母が俄かにおそつた寒氣から、持病の喘息を起して、床についてしまった。

秋子は義母にかくれて、時どき見舞ひに來た。彼女がくると、健作の母は目に



みえて、元氣になるのだった。秋子もまた本當の母のやうな愛情を感じてゐるのだった。

しかし、健作の方は、秋子をあまり歓迎しなかつた。その親切は嬉しいのだが義母に秘密でくるといふことが、生一本な彼の氣持を傷つけたのだった。もし、このことが、口やかましいあの女に知れたら、なにをいひだすか、わかつたものではない。

『あなたの御厚意は感謝しますが、こんなわけで、ぼくはあなたに来ていたゞきたくないのです。母もおかげさまで大分快くなつたし……』

お使ひの歸りに寄つたといふ秋子を、家の外に呼び出し、健作は卒直にいつた。前の雑木林をならして、冷たい風がふいてくる。空は一面銀の砂のやうな星だつた。

しよんぼりうなだれてゐた秋子は、悲しさうにいつた。

『御心配かけて、本當に申譯ございません。』

『先生といふ職業は、世間の眼がじつにうるさいのです。ましてかういふ田舎下はね。せつかく藤井さんにお世話ねがつた學校を、つまらん噂でやめなければならなくなつたら、ぼくも困るしあなたのお父さまに對しても申譯ない。』

『すみません。ほんとにわたしばかりでしたわ。』

淋しさうに微笑つた秋子の双眼には、涙が一ぱい光つてゐた。

『寒いからもうお歸りなさい。』

その時、門の外で突然疝高い少女の笑聲がひゞいた。びつくりしてみると文子である。

『なんだ、文子さん、どうしたんだ?』

健作は鋭い調子できいた。

『どうもしないわ。』

『君は人の話を立ちぎきしてゐたのかね?』

それには答へず、文子は、青くなつて立ちすくんでゐる秋子にむかつて、憎々



しげにいった。

『お母さんにいひつけてやるから。』

さういふと、健作のとめるのもきかずバタ／＼とかけだして行つた。

ひねくれ娘

『おかしいな。たしかにこゝにおいた筈なんだが。』

教壇の机の上においた万年筆が、ちよつと外へでた間に失くなつてしまつたのだ。放課後で、掃除當番しか残つてゐない。

『誰か持つてゐるものがあつたら、あとで先生に返しにおいで。決して叱りやせんから。』

さういつて、教室を出ると、後から正直者の正太が追かけて來た。

『先生！』

『なんだ？。』

『さつき教壇の所に文子がゐましたから、あいつではありませんか？。』

『ばか。教壇にゐたから持つてるとはかぎらん。そんな証拠もなしに、人を疑つちやいかんぞ。』

とは叱つたが、てつきりさうにちがひないと思つた。何不自由なく育ちながら文子は、なんでも他人の物を欲しがるのだ。

まもなく、健作は、校門を出やうとしてゐる文子を見つけ、小使室の裏につれてきた。やさしくいつてきかしたが、どうしても白状しない。

『万年筆がほしかつたら、あとでいゝのを買つてあげやう。先生のは誰にもやれない、非常に大事な品だから返しておくれ。ちよつと鞆をみせなさい。』

鞆にはなく、内ポケットから出て來た。文子はワーツと火のついたやうに泣きながら、鞆をおつぽりだして走り出した。

『こら、待て！』

ふにかにつまづき、文子はばつたり前にころんだ。それをひき起すと、パンパ



ンと平手打ちをくれて、

『泣け！ いくらでも泣け！ このひねくれものめ！』

情なくて健作も涙が出る。ふと気がついてみると、ころんだ拍子にぶつたのか  
文子の膝小僧がさけて、ダラ／＼血が出てゐる。

『わーんツ、わーんツ。』

文子は態とならし聲で泣き叫ぶ。

### 意外な結果

『校長も弱つとつたよ。』

小學校から歸つて來た藤井町長は五十がらみの好人物らしい男。

『娘の命を助けてくれた恩人ではあるが、さういふ亂暴な男を、先生にしておく  
ことは、兒童の訓育上はなはだ面白くないし、又、紹介したわしも、他の父兄に  
對して面目ないといふと、校長はすつかり恐縮して、本人を呼び適當な處置を

とるといつてゐたよ。』

『それはよござんした。大体、自分の不始末を文子に見られたからといつて、罪  
科もないあんな子供を、ぶつたり蹴つたりするなんて、まるで氣狂ひぎたですよ  
秋さんも文子のおかげで救はれました。あんな男の甘言にのつてゐたら、しまひ  
にどんなことになつたか、思つてもゾツとします。』

『あれの親爺は實に眞面目な男だつたが、まつたく今時の青年には困つたものぢ  
や。しかし、誘惑にのる秋も悪いのだから、お前もよく注意しなくちやいかん  
よ。』

藤井町長は昨日、滿洲旅行から歸つて來たばかりである。

この時分、濠作は、暗い氣持を抱いて、學校の門を出た。今し方、校長にいは  
れたことは、なにもかも意外だつた。

健作は、秋子を誘惑してゐるのを、文子に發見されたから、それを根にもつて  
文子をひどい目にあはしたといふのである。彼は文子の悪いのが恐しかった。そ



れをどうすることも出来ない、自分の無力が悲しくなつた。

『文子を制裁したのは、別の理由からですが、それは本人と約束をしましたから申しあげられません。』

校長はさういふ健作にむかつて、

『君のやりかたはどうも面白くない。せつかく町長夫人が厚意でかしてくれた家を出たりして、さういふ態度はいかんね。とにかく一度町長にあつて、あやまつてきたまへ。』

『あやまる理由はありません。』

『それがいかんといふんだ。長上に對しては禮儀をもつて。』

『失禮しました。ぼくはけふ限りやめます。』

そのまゝ校長室を飛び出した健作である。

(ようし、東京へ行かう。東京へ行つて元氣一ぱいやるんだ。)

### 悲しき別れ

それから十日ばかり過ぎたある晴れた朝、健作母子は、近所の人に送られて、その山間の小さな町を旅立つたのだつた。

國境連山の頂きに輝く雪が、健作の眼に深く映じた。あの山をみるのもけふが最後だ、なつかしの故郷よ！

驛へ行つてみると、恰度日曜だつたが、何百といふ生徒が、健作をとりまいた子供たちの親も、六年は全部来てゐた。

『いゝ先生でしたのにねえ。』

『ほんとに……。』

みんなそんなことをいって、健作の方を見てゐた。親しさうに悲しさうに。

健作は快活に笑ひながら、別れを惜しむ生徒をばげましたり、冗談をいって笑はしたりしてゐた。



「おや、秋子さん！」

健作の母は嬉しうに、待合室を出て行つた。賣店の横に、秋子が人目をさけるやうに立つてゐた。

「健作！」

と母が呼んだ。

「みんな、わたしが至らなかつたからでございませう。」

健作の前に頭を下げた秋子は、こみあげてくる悲しさを抑へるやうに、キツと唇をかんだ。

「やめたのは僕の勝手ですから、決して氣にかけないで下さい。」  
母口を添へて、

「健作はこれからですもの。元氣なもんですわ。あんたどんな悲しいこと、辛いことがあつても、力を落さずにね。」

「有難うございます。」

その時、列車がはいつてきた。健作はポケットから小さい紙包みを取り出して「これを文子さんに渡して下さい。あんたが來なかつたら、誰かに頼まうと思つてゐたんです。あの子は不幸な子です。會はずにいくのが残念だといつて下さい。」

「ハイ。」

すでに列車は動きだした。

正太が列から走り出て、健作の手を握つた。

「先生！」

「正太、しつかりやれよ！」

子供たちは一せいに萬歳を叫んだ。

女たちの中にはもうハンカチを眼にあてゝゐる人もあつた。

初めて知る師恩



『太田先生からなんですよ?』

紙包みをあけてみると、中から、古ぼけた万年筆が出て来た。文子はサツと赤くなつた。手紙が添へてある。

(文子さん、お別れです。この万年筆は、私の父がのこしてくれたたゞ一つの形見です。父は曲つたことの大嫌ひな、りつばな人でした。三十何年間、コツ／＼とあなたのお父様の下で働いたのです。この万年筆には、正直で勤勉な父の汗がしみこんでゐます。先生が誰にも渡せない大事な品だといつたわけがわかつたでせう。

文子さんどうかりつばな人になつて下さい。生れかはつて、新しい先生の仰言ることをよくきく、親切なよい子になつて下さい。万年筆のことは誰にも話してゐません。先生は約束をはたしました。

文子さん、こんどはあなたが約束して下さい。りつばな、正しい心をもつた、親切でよい子供になると。先生はそれをかたく／＼信じてゐます。先生のいふこ

とがわかつたら、万年筆ありがたうとかいてはがきを下さい。先生はそればかり待つてゐます。いつまでも／＼待つてゐますよ。

(健作)

文子はワツと泣きだした。

『お姉さま、あたしどうしませう!』

それは秋子が始めてみる悲しい妹の眸の色だつた。

『會はずにいくのが残念だと仰言つてゐましたよ。先生は文子さんをとてもく／＼愛してゐましたのよ。』

文子の泣聲をき／＼つけて、夫人がもう顔色かへて出て来た。

『どうしたんです。秋さん!』

『ちがふわよ、お母さま! あたしよ、あたしが悪かつたのよ!』

文子はさういつて又泣きだした。

たまらなくなつて、秋子はつぎの間にたつた。



父が出て来た。彼は文子の口から一切のことを知った。手紙をよんだ夫人は、蒼ざめた顔で、じつと何か考へてゐるが、やがて、良人の前に両手をつき、

『みんな私の罪でございます。どうかお許し下さいまし。』

涙ながらにあやまつた。

『こんなりつばな先生を……馬鹿な奴共だ。文子、すぐ仕度をしなさい。先生のあとを追つて、おわびに行くんだ。いや、これはわたしの粗忽である。とにかく、すぐ東京へ行かう。』

『秋さん、私たちも参りませう。』

と夫人がいった。

『どんなことをしても、もう一度歸つていたゞかなく



ちやなりませんわ。』

その聲を秋子は夢のやうにきいた。涙がとめどなく頬をぬらしていつた。

た。

早春の空は紺青に輝いてゐる。どこかでうぐひすの聲が

している。

やがて、一家四人をのせた

自動車は、勢ひよく邸内を滑り出し、停車場へとむかつた。



(をばり)



# 輝く勝利

## (一) 友情

ある日のお晝休みだった。

『節約函を開けましたね。ラケットでも買はうといふのかね』

小町小學校で、校庭のポプラの下へ集つた六年生たちの後へ、いつの間にか受持の安田先生が微笑を浮べて立つてゐた。

『足りなければ、すこしぐらゐ先生が足してあげてもいゝぞ。』

節約函は、この級の共同貯金で、これが貯ると、みんなで相談の上、ラケットやボールなどを、買ふことになつてゐる。

『先生、違ひます。これは内山好雄君のお母さんに、お見舞を贈らうといふんで

す。』

帽子の中へ一錢銅貨や五錢白銅を、七、八十錢集めてゐた級長の太田次郎は、姿勢を正してさう答へた。

『お見舞………すると内山君は、お母さんのご病氣で學校を休んでゐるのかね。』

『さうです、内山君は、ことによると、このまゝ學校を止すかも知れないんです先生！ 内山君はかはいさうです。それで、お母さん想ひの内山君を喜ばしたいと思つて、みんなが昨日と今日のお小遣ひを出しあつて、ご病氣のお母さんに、なにか贈ることになつたんです。』

太田君はさう言ふと、す早く袖で眼を拭いた。

『學校を止すかも知れないつて？』

副級長の内山好雄が、こゝ半月餘りずつと休んでゐるのを不思議に思つてゐた安田先生は、心配さうに眉をひそめた。



『さうです。内山君は、もう電報配達になつて働いてゐるんです！内山君さへ受けてくれれば、六年生は、節約函のお金を、内山君の學費にしてもいゝといふことになつたんです。先生！なんとかして、もう一度内山君を學校へ出られるやうにできないものでせうか？』

六年生一同の、この温い友情の言葉を聞くと、安田先生も思はず涙ぐまずにはゐられなかつた。

『さうか、それで學校へ出てこよかつたのか……しかし、内山君は、君たちのやうにいゝ友達を持つて仕合せだ。それではよく事情を聞いた上で、先生もぜひ君たちの仲間へ入れてもらはう！さ、くわしい話を聞かしてくれ給へ。』

たのもしさうに微笑んだ先生も眼の中には、眞夏の光をうつした感激の涙が、こぼれさうに盛りあがつてゐた。

## (二) 小使さん

内山好雄の家は、母と妹の三人暮しだつた。四五年前に、父親が亡くなつてから女手一つで、好雄と妹の道子を育てるために、苦い暮しをつゞけてきた病身の母親がこゝ一ヶ月ほど以前から、とう／＼床についてしまつたのだ。

『お母さん大丈夫です！こんどは僕が働きますから安心して寝んでゐて下さい。』

自分が働くよりほかに暮しの立つ方法はない——さう思ふと、好雄は、無理にたのんだ隣りの小父さんの口添へで、町の郵便局へ電報配達としてつとめるやうになつた。

『もう少しで小學校だけは終るといふのに、苦勞をさせてすまないね。』

床の中で苦しさに顔をゆがめてゐる母へ、

『お母さん、勉強は心がけ次第でいくらでもできますよ。そんなことよりお母さんが早くなほつて下さい、道子の奴がさびしがりますからねえ。』

口ではさう元氣よくいふものゝ同級生たちが、もう中學のうわさなどしてゐた



ことを思ひ出すと、好雄はふつときびしくなった。  
『なをりますとも、なをつて一日も早くあんたが学校へいけるやうに働きますか  
らねえ。』

『いゝんですよ。そんなことはいゝんです。そんなことより郵便局の赤い自転車  
は、とてもよく走つて愉快ですよ。もう僕、樂に足がとぎますからねえ。』

好雄がさういつて母をなぐさめると、妹の道子までが、小さなお河童をふり  
ながら、元氣のいゝことをいふのだつた。

『私だつて、学校なんか休んで』

そのくせ道子は、学校の歸りな

どに、好雄の赤い自転車のペダル  
をふんで、輕快に乗りまはしてゐ  
るのに出會ふと、

『兄さん乗せてよオ!』



納豆賣りでもなんでもするわ!』

と、走つて來たりす  
るのである。道子はま  
だ二年生だつた。

郵便局では、さひは

ひ好雄のすばしこい動

作が局員達の氣にいつて、

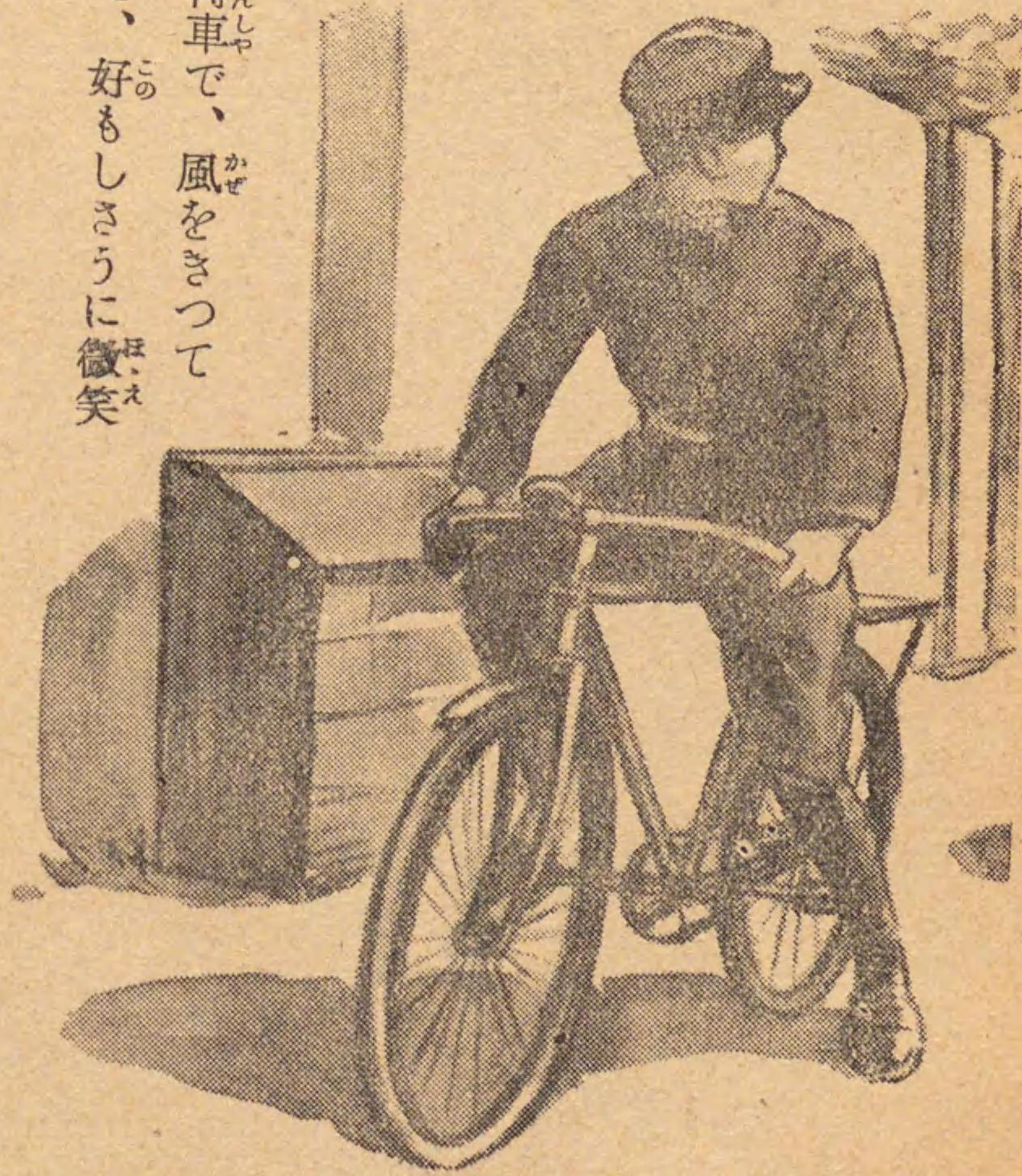
『電報配達は少年に限る

やうだぞ。』

局長までが、赤い自転車で、風をきつて

走つて歸る好雄の姿を見て、好もしさうに微笑

んでゐた。



かうして好雄は、働き出して十日ばかりは、ほがらかに過してきたのであるが  
つい二三日前からまたひどく沈んでしまつた。



『どうした、顔色がばかに悪いぞ。』

仲よしになつた小使ひの源爺さんが、自分のことのやうに心配してたづねると

ああ僕はお金が必要！』

好雄はさういつて頭をかへた。

『お金、お金なら俺だつてほしくないこともないが……他ならぬ好坊のこと

だ、少しぐらゐなら貸してあげるぜ。』

『それが、すこしぢやないんだよ小父さん……。』

『一體いくら入用なんだい？』

『百圓ぐらゐほしいんだよ。』

『百圓……？』

源爺さんは眼を丸くした。

『百圓といへば、お前の半年分の給料ぢやないか。』

『さうなんだ。そのお金がなければ、お母さんの病氣がなほせないんだよ。お母

さんの病氣は盲腸炎といふ病氣で、盲腸の膿まないうちに手術しなければなら  
ないとお醫者さんが云ふんだよ。入院して手術するには、どうしてもそのくらゐ  
のお金がかかるんだつて……。』

『そいつあ困つた！ 五圓や十圓なら俺にも出来るが……、百圓となると困つ

たなあ……。』

小使室で好雄とならんだ源爺さんも、禿げた頭をかへて考へこんでしまつ

た。

それは、恰度三日前のことだつた。

(三) 小さい選手

校庭では級長の太田次郎に、好雄の家の事情を細々とさかされた安田先生が、

『それでは先生も君たちの仲間にはいつて、先づ五十錢醸金しよう。それで今日

の放課後に誰か代表者を選ん、お見舞にいつてくるんだね。それから内山君の通



學のことはなんとか先生が取はからう。まあまかしておいてくれ給へ。』  
自信にみちてさういられると、みんなはすつかり安心した。  
しかし、この四五日、好雄がめつきりと沈んでる原因だけは、親友の太田君も全然知らなかつた。いや、その原因は、學校へこられない悲しみからだと思じてゐる。

間もなく授業の鐘が鳴つて、六年生は體操の時間だつた。

『今日は水野河原まで駆足だ、そのかはり……』

と、先生がいひだすと、もうあちこちで、

『自轉車競走を見せてくれるんだよ。』

『先生話せるなあ。』

『すてき〜！』

などといふさゝやきが聞えはじめる。

學校から二十町ほど離れた水野河原では近隣の町から選手たちが集つて、今日

は、年中行事の自轉車競技會が行はれてゐるのである、

『そのかはり、向ふへ着いたら自轉車競技を見物させる！』

先生の聲が終らぬうちに、ドツと歡呼と拍手がわく。

呼物の十周競走が午前中に豫選を終つて、午後一時から、準決勝、決勝とあ

る。

それが見たいばかりにみんなよく走つた。

競技場へついた時は、十周競走の最後の準決勝組が、それごとく自轉車のマ

イクのはいつたユニフォームで、正面のスタートへならんだところだつた。

約二十人はゐる。どの顔も蒼白く緊張して、軽快な競走車の車輪は、太陽に輝

いてゐる。競技場へつめかけた見物人も、方々の町から集つて數千人といふ數で

ある。

六年生一同はやうやく見られる場所へ割り込んだ。

合圖のピストルが青空高く鳴りわたつた！選手たちは、何本かの光線のやう



に、サアツとスタートをはなれて走つてくる……」

優勝者には銀製の大きなカップの他に、勝つた自轉車の會社から、一等百圓、二等五十圓、三等三十圓の賞金をねらつて出てくる十八九から二十三四歳の、見るからにたくましい青年が多い。

それだけに亂暴で、スタートを放れるとすぐに、もう三四臺が小猫のやうに、地上へはうりだされた。

やうやく起きあがる者、救護班にかつぎこまれる者――

『やいッ、好坊頑張れッ!』

六年生のすぐ眼の前で、禿げた頭へ向ふ鉢巻をした老人が、大肌ぬぎになつてとてつもなく大きな聲でさけんでゐる。

安田先生は、そのやうすに思はず微笑して、次の瞬間

『あッ!』

と驚きの聲をあげた。

白く光つた自轉車の中に、たつた一臺まぢつた赤い車! それはまぎれもない郵便局の自轉車である。

その自轉車へ吸ひつくやうに身を伏せた乗り手こそ、教へ子の内山好雄だつたのだ!

一周、二周、三周――赤い自轉車はぐんぐん列をぬきだした。

『好坊ッ! 俺がついてゐるぞッ! やいッ、お母さんが助かるんだゾ!』

熱狂した向ふ鉢巻の老人は、いはすと知れた小使の源爺さんだ。

五周、六周、七周――

先生は、この孝行な教へ子にけがのないやう、それだけをひたすら心に祈つてゐた。

次の車を六・七米抜いたまゝ、赤い自轉車はつひに堂々とゴールへはいつた先生はホツとして額の汗をふいた。

『やあい、勝つた勝つた!』



源爺さんはをどりあがつてゐる。

「どんなもんだい！ といふやうに、小鼻をふくらまして、得意になつて後をふり向いた。そして、始めて安田先生の姿を見つけると、

『これは学校の先生！ この分ならば、内山好坊は優勝しますぜ！ えゝ優勝しますとも、第一あつしがついてゐる、あつしだけぢやねえ、親孝行の神様がいつてゐる！ これが敗けたら世の中は闇でさあ。』

源爺さんは、感きはまつてボロ／＼と泣き出してゐた。

『えゝ内山だつて……』

『なに、あの赤いのが内山か……』

六年生たちも、やうやく氣づいた様子である。

(四) 先生泣く

『内山ッ！』

『がんばれッ！』

『好坊ッ！ お母さんの生命だゾ！』

級友たちも源爺さんも滅茶々にこうふんしてゐる。安田先生は、もう優勝戦へ出るのを止めることができなかった。

次にスタートへ立つた選手は、準決勝の一、二着が八人だつた。

いづれも見ることからに強さうな若者揃ひである。その中で、大柄とはいへ十三歳の好雄の姿は、鳥の群に小鳥が一羽まぢつたやうな痛々しさである。

それが、堅く齒を喰ひしぼつて、顔にはまるで血の氣がない。

再びピストルは鋭く鳴らされた！

一周、二周、美しい銀線を曳いて流れるやうに走り出した自轉車、その中で、たゞ一本の朱線である！

『バかに重さうだぞ！ 好坊がんばれッ！』

だが、疲れたのであらうか、赤い車は、だん／＼後へ後へ取り残される。



四周、五周、——依然として悪い。

他の競走車には、好雄の車のやうに泥よけなどはもちろんつけてない。車體の重さにも相當の差がある筈だ。

それに體力の違ひである。

『畜生！神様！………神様………』

源爺さんは立ち上つて、もどかしさうに拳固をふるつた。

八周目！

『おゝ、出るゾ、出るゾ！』

俄然！好雄は抜き出した。二臺、三臺、四臺、見る／＼うちに抜いて行く！それはまるで赤い彈丸だ！

『内山ッ！』

『内山ッ！』

級友たちの應援が一齊に爆發した。

『どんなもんでえ！』

源爺さんが、青空へぐつと拳固を突き上げた。トツフの一臺とすれ／＼になつて、すこしづつ抜き出したのだ。

だが、その時、安田先生は、

『おゝ！』

とうめいて眼をつむつた。

抜いたトツフの一臺とすれ／＼に車輪をつらねて最後のカーブへかゝつた刹那ガチャッ！と後から車輪がふれたのだ。

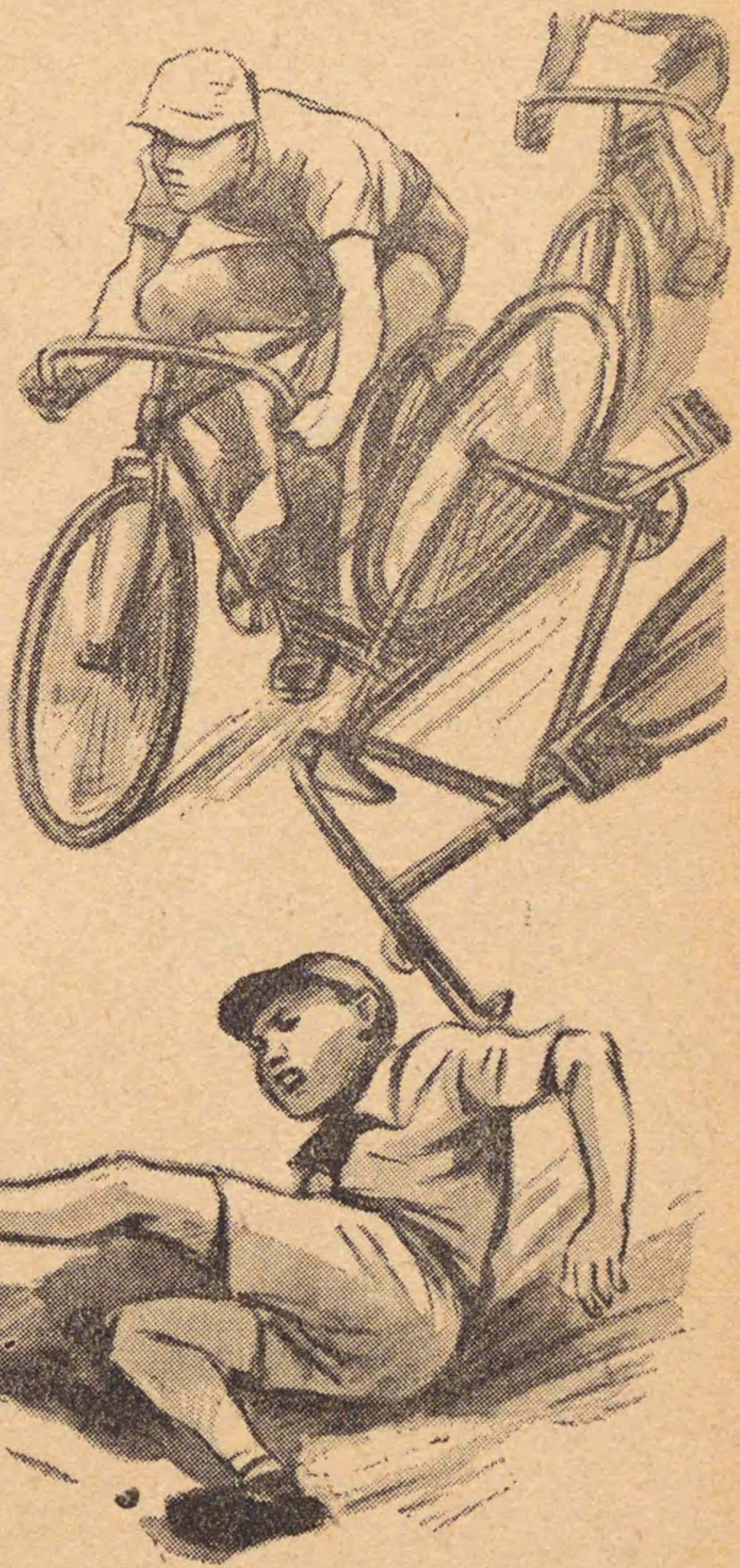
それと同時に！彈丸のやうな赤い自轉車は、パット大きく空へをどつて、はづみをくらつた好雄の小さなからだは、五六間先へフット・ボールのやうに投げ出されてゐた。

『あッあッ畜生ッ！』

源爺さんは氣狂ひのやうに駆けだした。



ドッ！と観衆のどよめく中を、三番目の車がゴールへ入った。



『内山ッ！ 内山ッしつかりしろ！』

『おい！ 好坊！』

安田先生と源爺さんが、あわて、両方からたきあげた

が、好雄は齒を

喰ひしばつたまゝ、死んだやうに動かなかつた。

土にまみれた顔と足から、かすかに血潮がにじんである。

『好坊！ 好坊！ あゝ……先生、好坊を殺してしまつた！ 好坊を殺したの

はあついだ！ あついが好坊を、金もうけだからつて無理に引っぱり出してしま

つたんだ……』

源爺さんのオロ／＼してゐるうちに、救護班からは醫者がかけて来る。

親友の身を氣づかふ級友たちがかけつける。

好雄のまはりは不安な顔でうづまつてしまつた。

『どうしたんです。どうしたんです？ こんな少年をまた、なぜ出場させたん

ですか……』

新聞記者が、源爺さんを叱りつけるやうに口をとがらしてゐる。

『大丈夫でせうか？』

安田先生は、好雄をしつかりとたきあげてゐた。



そして、聴診器を小さな胸にあて、しきりに首をかしげてゐる醫者に小聲で  
きいた。

『大丈夫でせう、しばらく入院させる必要はありますが……』

醫者はさう答へて靜かに閉じてゐる好雄のまぶたを開いてみた。

その時だつた。

今まで堅く喰ひしばつてゐた好雄の唇は、かすかに笑ひをふくんでほころび

かけたのだ、そして、

『勝つた……お母さん勝つた……これで入院できますよお母さん……』

『うわ言ですね』

安田先生は激しく兩眼をしばたゝいた。

たまりかねた源爺さんの泣き聲につれて、級友たちのすゝり泣があちこちから

湧き上つた。

その翌日の新聞には、

『孝子に輝く血の敗戦！』

といふ大きな見出しで、この日の出来事がこと細かに報道された。

——級友一同の温い友情と、母をおもふ孝子の一念に感激して、立會つた醫  
師の村上泰造氏は、直ちに内山好雄君の母も引き取つて一緒に入院させた。そし  
て、母の盲腸炎は、もう四五日放置すると、生命に關するほどの症状だつたとい  
ふ。それについて村上氏は微笑をうかべてかう語つた。結局、好雄君は、自分が  
負傷しましたが、自分の血でお母さんの生命を救つたわけです。競技場へ流れた  
血はその意味で眞に尊いものでした。——

その日の夕方だつた。級長を件つた安田先生が、村上病院へ好雄を見舞ふと、  
腰と胸と顔に打撲傷と擦過傷をうけた好雄は、ちやうど眠つてゐて、丸々と肥つ

(五)

幸

福



た局長と、源爺さんがつきそつてゐた。

『やあ、これは先生。』

あいそよく椅子をすゝめる局長へ、安田先生は、

『實は局長さん……これは、六年生一同の意見なんですが、内山君も、もう少しで小學校を卒るのですから、學校を卒るまで郵便局を退かして頂けませんか。』

局長はひどくむつかしい顔をして

『考へてごらんさい。今までは、僕は、好雄君に、こんな深い事情のあることを知らなかつたからいゝやうなもの、かうなつたら、貴方がただに勝手に助けられては、僕や源爺さんの面目が立ちません。この問題は、どうです先生、僕等の方へまかしてくれませんか、つまり本人は、誰の助けも受けないで、自分で學校へいけるといふ方法なんですが……』

『そんな方法がありますか？』

『ありますよ先生、今も局長さんと相談したんですが、好坊が學校へいつてゐる間だけ、あつしが、好坊のかはりに電報も配達するといふわけなんですよ。なかに、あつしだつてまだ自轉車位にや乗れますからね。これでも昔は自轉車競走で……』

といひかけて、源爺さんは、まづいことを言つたといふやうに、あわてゝ禿げた頭をかいた。

『つまり、勤めながら學校へいける。これなら勝氣な好雄君も、誰にも氣兼ねもありませんから、一番いゝ方法だと思ふんですがね。』

局長にさういはれると、安田先生は、自分のことのやうに喜んで頭を下げた。

局長さん、たしかにさうです。ありがたうございます。』

この時、好雄は、かすかに眼を見開いた。

『お、眼がさめたかね内山君。』



好雄は自分の顔をやさしくのぞきこんでゐるのがなつかしい恩師の安田先生だと知ると、思はず先生の手を握つた。

『いや、よくやつた！ 偉い！ 人間はそれでなければいけない、他人にすぎるやうな奴はだめだ。これだけの苦勞を一人で背負はうとする、その立派な覺悟がつひに君を救つたんだ！ 君はまたなほつたら、また學校へいけることになつたんだよ。さ、局長さんに御禮を申上げ給へ。』

『内山君。よかつたね！ これは、君のお母さんに、六年生全部のお見舞なんだよ。』

太田君がさげてきた果物籠をさし出すと、

『えゝもうお受けしますとも、お母さんは隣りの部屋だ、あつしがすぐにとどけてくる……』

源爺さんが横から手を出してすばやく果物籠を受取つた。

そして部屋を駆け出しながら、嬉しさうに禿げ頭をふつて云ふのである。

『ほら、見ろ！ あの競走は、やつぱり勝つたも同じだ。いや、勝つたよりも、もつといふことになつたぢやねえか！』

(をはり)

# 紅 顔 決 死 隊

## カイゼルの弟

紺青に吹きはらはれた夕空たかく、屯墾隊本部の日章旗が、ハタ／＼と風になつてゐた。

こゝは吉林省の奥地、京圖線の敦化から十數哩北に寄つた日本の移民村だ。

突然ワーツと喊聲が土壘のかげからあがつた。一日の仕事をした移民たちが本部の前に集つて、相撲をとつてゐるのだ。

今しも土俵のまん中で四つになつてゐるのは、永見健治と武井勇三といふ少年。



健治はスラリとのびた軀、愛くるしい顔立ち。勇三は色が黒くて、すんぐりしてゐる。

『健ちゃん、がんばれ〜！』

男みたいに呼んでゐる美しい少女は、戸田といふ豫備陸軍大尉の一粒だねユリ子。屯墾隊長の娘さんだ。

勇三が土俵際に押されて来た。

『しつかりしろなんだ、その態は！』

カイゼルといふ綽名の武井剛太。兄さんにはげまされ勇三は、歯をくひしばつて下手投げをうつた。

健治は土煙りをあげてころがつた。

『弱虫！なんだい、意氣地なし！』

頭をかいてゐる健治にむかつて、ユリ子が口惜しさうにいふ。

代つて飛び出したのが、満洲人の徐。牛みたいにのろ〜してゐるが、やつと

十五になつたば

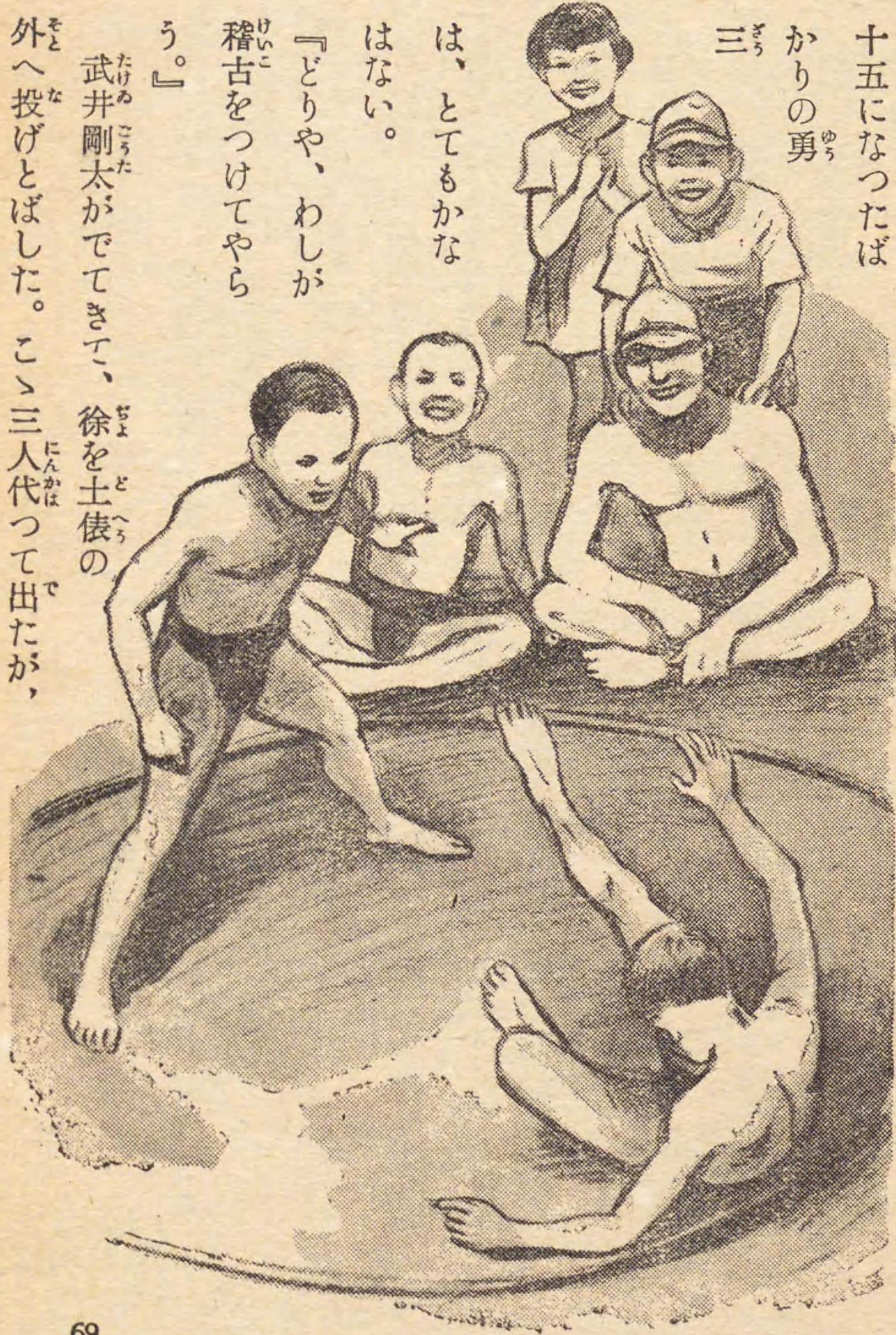
かりの勇

三

は、とてもかな  
はない。

『どりや、わしが  
稽古をつけてやら  
う。』

武井剛太がでてきて、徐を土俵の外へ投げとばした。こゝ三人代つて出たが、





てんで齒がたゝない。古い軍曹上りで、屯墾隊にはいるまで警官をやつてゐた彼は、どうも人を見下すくせがあつて、あまり評判はよくない。

『相手はゐないのか、相手は。弱虫ばかりそろつてけつかるわい。そんなことでもし匪賊が來たらどうする。』

『よし、おれがやらう。』

その時、健治の兄永見一郎が出て來た。樂天家でいつも冗談ばかりいつてゐる一郎は、とても人氣がある。去年まで現役の上等兵で、匪賊征伐をやつてゐただけに、射撃の名人、健治や勇三始め屯墾隊少年團の教導係りだ。

『お前みたいなたびぢや……』

武井は、頭から永見をのんでゐた。

『山椒は小粒でもからい。さあ、いらつしやい。』

見物は笑ひながら人氣者の名を呼んでゐる。健治と勇三の相撲は、つひに兄貴同士の勝負になつてしまつた。

しかし、軀からいつたつて、勝負にはなるまいと思つてゐたら、意外、立上りしな武井は足をとられて、スツテンコロリとこころがつかつた。

見物はやんやとはやしたてる。

武井は眞赤になつて

『いまのは油断だ。もう一丁！』

『くそ！ こんどこそはこのチビを土俵の砂にうづめてくれるぞ！』

やつと立上るなり、猛烈な突きを、相手の胸へ！

『おつとつと……』

とたん、ヒラリとかはした永見は、前のめりに泳いだ武井のうしろから、パツと突きとばした。

わーッと見物は喊聲をあげる。

四つばひになつた武井は、いやといふほど鼻面を大地にこすりつけて、カイゼルといふ綽名の自慢の八字髭は、黄粉でまぶしたやう。眼ばかり光らせてゐる。



ユリ子は大喜びで、

『武井さん、エチオピアの化物みたいだね。ホ、ホ、ホ、』  
『は、は、は、』

みんな大笑ひしてゐる中に、健治は悲しさうな顔をしてゐる。兄さんが負けたので涙ぐんでゐる勇三の姿が、氣の毒でたまらないのだ。

大爆音

屯墾隊といふのは、武装移民のことだ。荒地を開拓して、百姓をしながら、時には武器をとつて、匪賊と戦はなければならぬ。この屯墾隊は、はじめ戸田隊長以下百人ばかりの人数だったが、いろいろの設備がととのつたので、五十人ばかりの満洲人を加へたほか、ある者は内地からお嫁さんをよび、またある者は兄弟をよんだ。

健治や勇三は、この春北海道北見の小學校を出ると、同じ村の少年たち十数名

と一しよに、屯墾隊へやつてきた。高等を出てゐる者が多かつたが、健治は一番年下で十四。

健治の兄は中學を出てゐるので、この少年達に數學や國語、滿洲語を教へたり軍隊教練もやつた。

少年たちの中で、武井勇三が一番成績が悪かつた。妙にひねくれてゐるのだ。頭が悪いのではないが、一郎のいふことをきかないのだ。

ある晩、勇三は、永見に命じられた不寝番をすつばぬかして、戸田隊長からさんざんお叱言をくつた。

『共同生活にひとりでも規則を破るものがあつたら、全體がめちやくになるお前は一體不眞面目だ。健治を手本にせんといかん。』

少年たちの中で、健治が一番評判がよい。それを勇三はねたんである。一郎のいふことをきかないのも、そんな原因があつた。

短い夏がすぎて、高粱畑に冷たい風がふきはじめると、屯墾隊は、米や黍



の收穫、燃料の準備と、目がまはるほど忙がしくなる。その警戒手薄をねらつて  
 匪賊が襲つてくる。それでまだ一人前の仕事ができない少年たちは、隊員がねて  
 しまつてから、交替で要所々々の見張りに立つた。

その夜、健治は十二時から勇三とかはつた。夜が更けるにしたがひ、寒気がひ  
 しくと追つてくる。山のやうにつみあげた馬糧の乾草にくるまるやうにして、  
 健治は交替時間をまつてゐた。

木の枝につるしたカンテラの灯が、風で今にも消えさうになる。月のないまッ  
 暗な晩である。

(こんな日を匪賊は待ちかまへてゐるんだ油断はできんぞ。)

そんなことを考へてゐる時、突然、前方の闇の一點がピカツと青く光つた。健  
 治は弾かれたやうに小銃をとりなほした。

(ぬくてぢやないかな?)

さう思ふと、脊中から水をあびせられたやうにゾーツとしこ。

たしかにぬくてだ! 恐しい満洲の狼が襲つてきたのだ。無氣味に闇をとび  
 ちがつてゐる青光りの目玉は、一匹や二匹ではない。大勢ゐる時なら、たちまち  
 射殺して、なめし皮にしてしまふやつだが、なにしろ健治ひとり、いくら小銃が  
 あつても恐しい。助けを呼ぶのもあまり意氣地がないと思ひ、一足さがりにさが  
 つてきて、米倉庫の中に逃げこんだ。

そのうちパチ／＼と妙な音がするので、戸をあけてみると驚いた。自分がいま  
 へでゐた乾草の山が、猛烈な火の手をあげて燃えてゐるのだ。

『しまつた!』

カンテラの火が燃え移つたのだらう。どうしてそれが乾草にうつつたのか、考  
 へるひまもない。もうぬくてどころではない。健治はまッ青になつて、本部の方  
 へ駆けだしたが、たちまちある恐しい豫感が胸をかすめて、ギョツと立ちどまつ  
 た

米倉庫のとなりにある火薬貯藏所! みると、あゝ! もうその屋根に火がう



つつてゐる。

『大へんだー！ 大へんだー！』

屯墾隊はたちまち上を下への大騒ぎになつた。なにしろ晴天つゞきで乾ききつてゐるところへ、水といつたら飲料水にも不自由するところだからたまらない。

『貯藏所に火がはいつたぞー！』

誰か叫んだ時、突如、パツと目もくらむやうな白光がきらめき、ダーン!! 天地をくつがへす大爆音が起つた。

匪賊襲來

『健ちゃん。退くつでしよ。』

本部の裏の物置の隅つこで、ぼんやり考へこんでゐた健治は、ユリ子の聲をきくと、生き返つたやうに立上つた。

火災を起し大切な火薬を灰にしてしまつた健治は、二週間の禁足處分を受けた

のである。

『たかがぬくてぐらゐに怖れて、大切な持場をはなれるとは何事か。貴様も日本男兒なら切腹しておわびをしろ！』

兄の一郎は烈火の如く怒つたが、戸田隊長の口添へでやつとおさまつたのだ。

一郎はその日限り少年團の教導係りをやめ、武井剛太が後任となつた。

物置へ押しこめられてから、兄の一郎は顔を見せない。それを思ふと、自分の不注意ながら悲しくなる。

『肉團子、あつたかいうちにお上んなさいよ。』

ユリ子はいつも食事をもつてくるたびにやさしくなぐさめる。

『兄さんはどうしてるかしら？』

『どうもしてないわ。いくら怒つたつて兄弟なんだもの。今に忘れてしまふわよ。』

『でも、ぼくは兄さんが一番怖いんだ。』



『ホ、、、それから弾薬はねえ、二、三日中に敦化から来るさうよ。』  
 『あ、それはよかつたなあ。弾薬のない時、匪賊がたら大へんだからねえ。』  
 『だけど、木にむすびつけておいたカンテラの火が、どうして乾草に燃えうつつたのかしら？』

健治もそれは不審なのだ。風の強い晩であつたが、しかし、それぐらゐでカンテラが落ちるとは思へない。

『どつちにしたつて、ぼくが悪いんだ。持場をはなれたんだからね。』

『だからこんな物置にはいつてるんでしょ。もつと呑氣にしてなさいよ。』

ユリ子は十六だが、健治よりづつとく姉さんだつた。

その翌晩、恐しい匪賊が屯墾隊を襲つてきた。

### 悲壯な覺悟

この邊には、朴子周といふ匪賊の大頭目がゐて、その手下が吉林省一帯に根を

はり、討伐隊も手をやいてゐた。屯墾隊もこれまで二度ばかり襲撃をうけたが、隊員が勇しく戦つて撃退した。しかし、こんどは數がこの前の二倍も大勢なところへ、味方は命とたのむ弾薬の大部分を失つてゐる。本部にいくら残つてゐるが、大部隊の匪賊にむかつては、焼石に水だつた。

『隊員は各自の持場を死守して、非戦闘員は本部へ避難しろ。』

『小銃は射撃の熟練した者がもつて、徹夜防戦の覺悟しろ！』

戸田隊長は全員を集めてから命令した。

夜があけるまでだ。夜明けまで防ぎさへしたら、この邊には始終敦化の討伐隊が出動してゐるのだから、匪賊もひきあげるにちがひない。

不幸中の幸ひは、彼等はこつちに弾薬のないのを氣付いてゐないらしいことだ。いざとなつたら斬死の覺悟で、土壘のかけに鳴りをひそめてゐる此方の様子を、敵はなにか策戦あるとみたか、なかく攻めて來ない。

パン！ パ、パン！ 時どき打つてよこす。



永見一郎は本部の屋根の上に乗つて、月明りに敵の様子をみてゐた。

『危険だから下りろ！』

戸田隊長が下から叫んだ。

『大丈夫です。』

パアン！ パアン！ パパアン！

銃聲は、東から西から北から南から四方八方から敵が迫つてゐるのだ。

『この様子では少なくとも千以上の敵です。弾薬さへ豊富ならなんでもないのでに隊長 申 譯ありません。』

弟 健治の罪をきて、真先に死なうと決心してゐる一郎だ。

『なにをいつてるんだ。いくら弾丸があつたつて、これだけの敵が防ぎきれぬものか。』

すると、武井剛太が

『まつたくだ。一期の思ひ出に日本刀の斬れ味を見せてやらう。永見、下らんこ

とを考へるな。それより貴様の名射撃ぶりをみせてくれ。』

日頃仲の良くない武井にさういはれて、一郎はますますすまない氣持だ。

敵味方無氣味な睨みあひのうちに、夜があけた。ところが、匪賊は一向退却する様子がない。向ふも怖しいとみえ、攻めては來ないが、相變らず屯墾隊を包圍して、じつと此方のすきを見てゐる。そして又恐しい夜が來た。

弟よ死んでくれ

戸田隊長は一同を集めて相談した。

『こつちの弾薬がないと知つたら、匪賊は一舉に押し寄せるにちがひない。ゐながらにして、自滅をまつよりは、成否を天にまかして、敦化の日本守備隊に急援を求めよう。』

こゝから數哩南へ行くところよつとした部落がある。そこまで行けば守備隊と



連絡がつくのだ。しかし、敵の包圍をどうして抜けて出られやう！

隊員は思はず顔を見合した。

その時、永見一郎は決然と口をきつた。

『隊長、私が行きます。私がつと任務を果します。』

『さて、俺が行く。俺にまかせろ。』

さういつたのは武井剛太だ。

『永見は射撃がうまいから残つてろ。』

『いや、それは困る。』

『待つて下さい。それはあたしがいきますわ。』

突然、ユリ子が出て来た。

一同はびつくりして彼女をみた。

『かういふ役は大人より子供の方がいゝでしょ。あたし馬が上手だから一番適任だわ。』

一同はしーんと静まり返つた。

一郎の眼はこの時、やけつくやうに健治にそゞがれた。

(健治！ 何を愚圖々々してゐるか！ 臆病者の恥をそゞぐのはこの時だぞ！

さぎよく出てくれ！ 死んでくれ！ 健治！)

早くも兄の意中を知つた健治は、サツと蒼ざめた！

(さうだ！ おれだつて日本人だ！ 女なんかに負けるもんか！)

としきりに心で叫んでも、足が前に進まない。あの恐しい匪賊の中をひとりを通るのかと思ふと、軀がブル／＼震へるのだ。

戸田隊長はいつた。

『ユリ子、ではお前に頼まう。しつかりやつてくれ！』

沈痛な聲である。一同は思はずうなだれた。

みんな一緒に死なう。

『なに健治が行つた!!?』



一郎はサツと眼を輝した。

『お嬢さんの代りに行つたさうぢや。』

武井剛太がいつた。

(でかしたぞ！)

一郎は心で叫んだ。

健治の姿が闇にのみれるとまもなく、バンバンと今までにないはげしい銃聲が起つた。

『見付かつたかな！』

本部の裏手に集まつた少年團は、不安さうにその方をみた。そのうちに銃聲がとだえた。

と、ひとりがいつた。

『しかし、屯墾隊が手も足もでないのは、健ちゃんのせいなんだからね。健ちゃんの不注意が原因なんだ。』

『そらあさうだ。』

健治を責めてはいけない。彼の罪はりつぱにつぐなはれてゐると思ひながら、口ではそんなことをいつてゐるのだ。

と、その時、銃聲が又起つた。

『こんどは東の方だぜ！』

『健ちゃん、どこから抜け出さうかとグル／＼廻つてゐるんだね。』

『畜生、いゝ氣になつて打つてやがらあ。』

『匪賊のヒヨロ／＼弾丸なんかにあたつてたまるもんか！』

『おい、こんどは南の方へまはつたぞ！』

『うまく出てくればいゝがなあ。』

この、時さつきから頭を抱へて何か考へこんでゐた勇三が、突然、立上つた。  
『おれ、行つてくる！』

『ど、どこへ？』



「健ちゃんとしよに行くんだ！」

少年たちは呆氣にとられた。健治と一番仲の悪い勇三が、またなんだつて、そんなことをいひだしたんだらう！

「みんな許してくれ！ 許してくれ！」

勇三は泣き出した。

「火事を起したのは俺だ！ 弾薬を灰にしたのは、健ちゃんの不注意ぢやないんだ！ おれがやつたんだ！」

健治の評判のいゝのをねたんで、あの晩、勇三は、健治がぬいてに驚いて逃げだした間に、カンテラの火を乾草につけたのだつた。むろん、その火が弾薬を灰にしようなどとは夢にも思つてゐなかつたのだが――。

「泣かなくてもいゝわ。」

いつのまにかそのうしろにユリ子が立つてゐた。

「勇ちゃんもえらいわ。それをさいたら、健ちゃんが喜ぶわ。」

「おれ、これからいつて健ちゃんにあやまる！」

「さうだ！ 勇ちゃん、行け！ 健ちゃんを見殺しにしたら男ぢやないぞ！ おれも行く！」

ひとりの少年が叫んだ。

「行くぞ！ おれも！ 死ぬならしよだ！ みんなでしよに死なう。故郷を出る時、さう誓つて出て来たおれたちだ！」

「賛成！ あたしもしよに死ぬわ。」

燃え上る感激につままれて、少年たちは一せいに叫んだ。

「天皇陛下萬歳！」

「屯墾隊萬歳！」

そして、てんでに拳銃や短刀をもつて闇の中をまつしぐらに 土壘を躍りこえた。

「それ！ 少年團が出たぞ！」



「早く助けろー」

わーッと怒濤のやうな喊聲をあげて、みんな土壘のかげから飛び出した。もうかうなれば、討伐隊を待つまでもない、斬死の覚悟だ！

『左へ散開しろ！ 一気に突破するんだ！』

先頭に武井剛太が日本刀をふりかぶつて進む。永平一郎は名射手だ。小銃をとつて、狙ひ打ちにパーン、



パーン。  
匪賊も猛烈に射ちだし

輝く朝



太陽があがるのもまがあるまい。東の空がバラ色にそまつて、高い白揚樹の梢で、小鳥がさへづつてゐる。

屯墾隊は、今し方トラックで駆けつけた討伐隊の將卒たちで一ぱいだ。健治たちが敵の重圍を切り抜けて、つひに大任を果したのである。

本部の事務所には、二人の戦死者と三名の負傷者が横たはつてゐた。戦死者は大人の隊員だった。ユリ子も肩を打ちぬかれ、こんくと眠つてゐた。やがて、ユリ子は氣がついた。



「健ちゃんはお父さん？」

「こゝにゐます！」

「兵隊さんが来たのね？ あたし、みんなと一しよにいけなくて残念だったわ。出るとすぐ射たれてしまったのよ。」

健治は目に一ばい涙をうかべながら、ユリ子の枕元に近づいた。

「勇ちゃんのこと怒らないでせう？」

「怒るもんですか。これから親友になるんです。」

健治はむつつりいつた。そのうしろで、勇三がしきりに眼をこすつてゐた。

ユリ子の傷はまもなく全快した。そして、屯墾隊はますます盛んになり、少年たちの元氣な笑聲が絶えなかつた。

(をばり)

# 眞心の大時計

神田錦町河岸に和泉屋といふ大きな旅館がある。毎年春と秋は、東京見物の泊り客でにぎはふのだが、その年の秋には福島市のある小學校の修學旅行團體が、百人あまりの人数でくりこんで来た。

いづれも來春卒業するといふ六年生ばかり、これが最後の修學旅行だといふので、みんなのはしやぎぶりはたいしたものだ。

宮城、靖國神社、泉岳寺、と一日ちゆう足を棒に見物して宿へかへつても、誰もくたびれたといふ者はない。

「やア、東京は夜でもにぎやかだなア。」

「外へいつてみたいね。」

「だめだよ、先生と一しよでなけりや出ちやいけないんだつてさ。」



『つまんないの。それぢやみんなで何かして遊ぼうや。』

五六人の男生徒が二階の廊下へ出てさわいでゐるところへ、やはり五六人の女生徒が、外をながめるつもりで上つて来た。

『おい、ここは僕たちの場所なんだから、女は上つて来ちゃだめだよ。』

『女なんかおとなしく引こんでろ。』

男生徒たちは面白半分、肩をくんで通せんぼした。

『あらずるいわ、いぢわるねえ。』

『あんただけの宿屋ぢやないわよ。そんなにいぢわるするんなら、先生にひつけてやるから。』

と女生徒たちもなか／＼負けてはゐない。かうなると皆はたいくつでこまつてゐたところだから、いい相手が出来たとばかり、

『よし、来るなら来い、追つばらつてやるから。』

とドツと廊下を突進していった。

『いやアよ！ キヤーツ』

女生徒たちも面白がつて、ツル／＼にみがきこまれた廣い廊下をにげまはつた。

ところが、廊下の角を曲らうとしたとたん、肩をくんでかけていつた勢ひで、

誰がさはつたのか、壁ぎはの大鏡がすさまじい音を立て、廊下へたふれた。

さすがに皆ハツとして立ちどまつたが、鏡はもうこなみじんにくだけ散つてゐる。

女生徒はこれを見ると、コン／＼と下へにげていつてしまった。

『どうしたの 何をこはしたのだ！』

物音におどろいてかけ上つて来たのは、男生徒受持の谷本先生だ。

生徒たちは今までの元氣もどこへやら、青くなつてだまりこんでゐる。

『怪我はなかつたか？』

谷本先生はこはれた鏡を見ると、まづさういつて皆を見まはした。だが幸ひと



誰も怪我した者はない。

『怪我がなければいいが、いつたい誰がこんなことをしたんだね？』

皆はなほさらちぢみ上つたが、その時、一ばんはしにゐた松本英吉君が、キツと顔を上げて、

『先生、僕がやつたんです。』

『ふむ、よろしい、ちや松本お前だけちよつとおいで。』

先生はさういふと先に立つて、自分の部屋へ降りていった。

松本君はてつきりひどく叱られるものとかくごして、しほくと先生の後へし  
たがつた。

『松本、すんだことはしかたがない。お前一人がわるいのでないことは先生にも  
わかつてゐるが、よく正直にいつてくれた。いつでもその正直さをわすれちやい  
けないぞ。』

『はい。』

先生の思ひのほかやさしい言葉に思はずあついものが松本君の胸へこみ上げて  
来た。

『鏡のことは先生がべんしやうしてあやまるからいい。心配しないで部屋へお  
へり。』

『す、すみません、先生。これからは氣をつけます。』

松本君はもうポロ／＼涙をこぼしながら頭を下げ、先生がいいといふのを、む  
りに宿の主人のところまでついていった

『そんなわけで大變申しわけのないことをしましたが、鏡の代はべんしやうさせ  
てくれませんか。』

と谷本先生がたのみこむと、

『いえ、それはもう元氣なお子さん方のことですから、私どもでは何とも思つて  
をりません。そんな御心配は決して御無用です。なアに生徒さんにお怪我のなか  
つたのが何よりですよ。』



主人はさういつて、どうしてもべんしやうのお金を受けとらない。それでは先生もどうしやうもなかつたので、たゞあやまつたゞけでそのことはすんでしまつた。

かうして一同は愉快な修學旅行をおへてかへつていつたが、その年も暮れ、翌年もこえた昭和十二年の六月、和泉屋旅館の玄關へ、はんでんにももひき、ゴムたびといふかつこうの、小僧さん風の少年がたづねて来た。

『私にあひたいといふのはお前さんかね？』

玄關へ出た主人は、ふしぎさうにその少年を見まもつた。

『はい、私は松本英吉といふ者です。おわすれかも知れませんが、一昨年おととしの秋、あきくにの小學校から修學旅行に来て、こちらへ泊めていたゞいた者です。』

『おお、さういへば見おぼえがある。それぢや福島の小學校の生徒さんでしたね。』

主人もなつかしさうに眼を見はつて、

『それで、そのあんたが、何の御用で見へたんですか？』

『あの時、私はこちらの鏡をこはしました。』

『さうく、そんなことがありましたな。』

『實はそれで、いつかはおわびに来やう來やうと思つてゐたのですが、何しろこの通りの小僧のことですから、なか／＼お金がたまりませんで。』

松本君がかういつてとり出したのは、小さな紙包である。

『何です、これは？』

主人はその中から、銅貨や白銅ばかりのお金が出て来たのを見ると、驚いて松本君を見なほした。

『はい、これあたて新しい鏡を買つていたゞきたいのです。まだ足りないと思ひますが、ちやうど一年かゝつてこれだけになりました。あとはまた來年までにためておとけしますから、……』

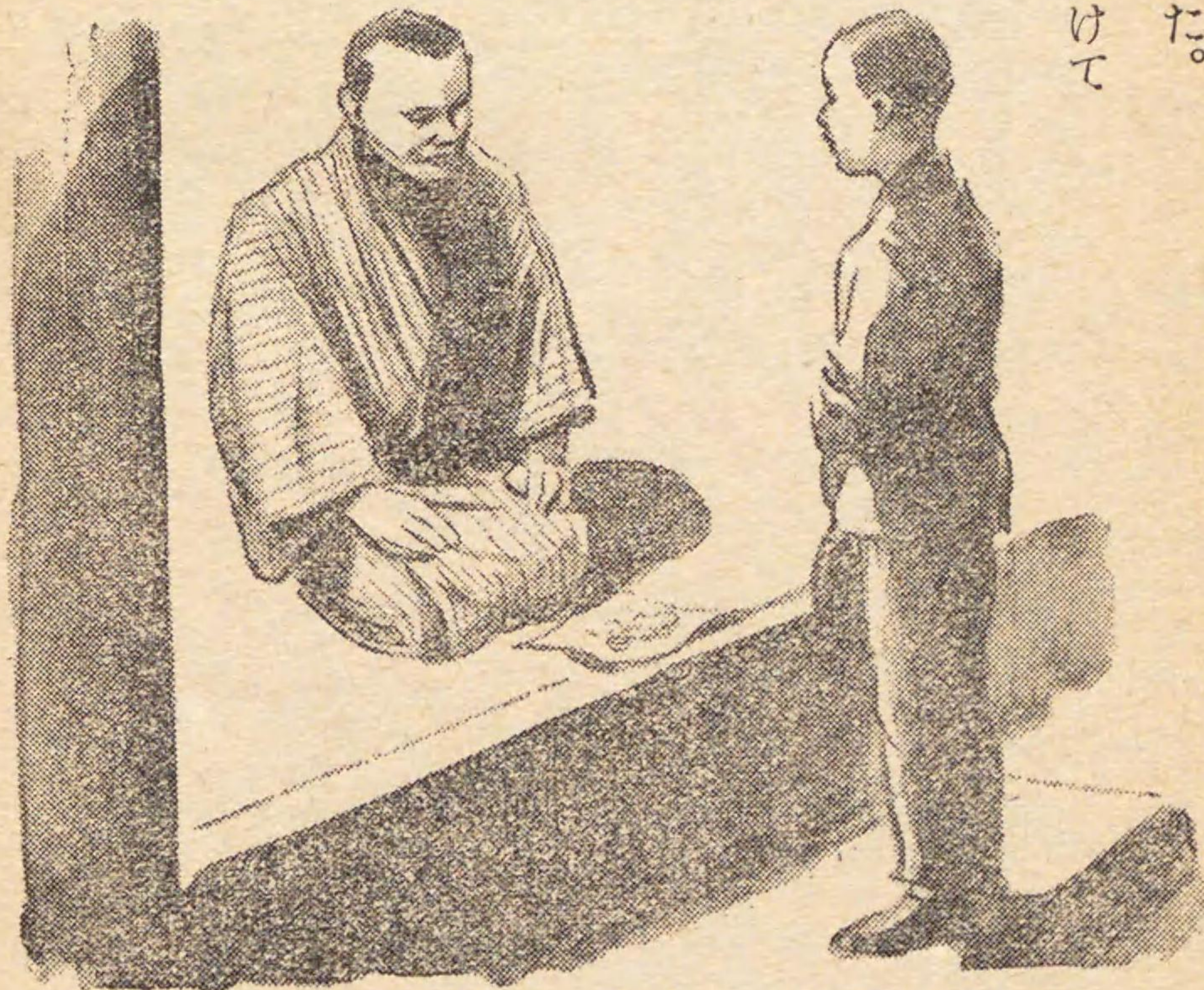
『松本さん、あんたはえらい方ですなア。』



主人は感たんしたやうしさへぎつた。

『あんな鏡のことをそんなに氣にかけてゐなさんなんて、いや實にどうも見上げたものです。いくらあるか知りませんが、失禮ながら小僧さんのおつとめで、これだけためなさんのは大抵ぢやないでせう。私どもではあなたのそのお志だけで十分です。これはこのまゝお持ちかへりになつて下さい。』  
『いえ、それぢや困ります。私の氣がすみませんから。』

松本君はどうしてもおいていか



うとする、主人は受けとらない、二度三度と押問答の末、

『ではかうしませう。せつかくあなたも苦勞してためて來なすつたものだ、一おうこれは私がいたゞくとして、あらためてあなたの母校、福島の小學校へ寄附しませう。』

と主人がいひ出した。これには松本君も承知しないわけにはいかなかつた。

紙包の金は全部で九圓二十五錢あつた。主人はさつそくそれにくわしい手紙をそへ、谷本先生あてに送つた。

松本君は去年の春母校を卒業するとすぐ、友だち連中が高等科や中學校へすすむ中から、奉公してはたらくために上京して來たのだ。

『松本は成績もいゝのだから、出來たら上の學校へすすむといひのだが。』  
と谷本先生もいつてくれたが、家のまづしい松本君は、どうしてもさうしてゐられなかつた。そして今では、上野廣小路裏の八百屋さんではたらいてゐるのである。



谷本先生は和泉屋旅館の主人からの手紙を見て、  
 『よくやつてくれた！ さすがは松本だ。この尊い金をむだに使つてはすまん。』  
 と涙を流して喜び、色々学校の先生方とも相談の末、松本君の志を永久に記  
 念するため、学校の講堂へかゝげる大時計を寄附することになった。  
 これを聞きつたへた生徒たちの父兄や、町の有力者たちは、我も我もと寄附を  
 申し込み、たちまち立派な大時計をもとめることが出来た。『松本英吉君寄贈』  
 と金文字で書かれた大時計は、今松本君の母校の講堂に、たゆみなく時をきざん  
 でゐる。

## 街の英雄

美しき親子

人の波を渦巻き返してゐる東京新宿のある横通りに、この夏、夕方から八時  
 頃へかけて、姉弟の花賣りが現はれた。姉は十六七のつゝましい女学校の制服で  
 恥かしさうに花籠を抱へて立つてゐる。  
 『花を買つて下さい。五錢と十錢です。切立の新鮮な花を買つて下さい。』  
 弾んだ聲でさう叫んでゐる。弟は、十三四の眼のくりくした快活な少年  
 だ買ひさうな人を見ると、いきなり胸許へ飛びこんで行つて、否應なしに花束を  
 握らしてしまふ。

『良ちゃん！』

姉は赤くなつてたしなめるが、少年はとても無邪氣で威勢がいゝ。客自身思は  
 ず微笑してしまふほど、無遠慮で、たくまざる愛嬌がある。

その態度や服装からみても、姉弟が良家の子女といふことが想像される。

大木ふさ子さん、同じく良介君といふのがこの姉弟の本名だ。お父さんは豫備  
 陸軍少將で、道樂かたぐ世田ヶ谷の奥で、園藝をやつてゐる。



このお父さんの家作に、山田直造さんといふ八百屋さんがある。不幸な人でこの春妻君をなくしてから、自分も心臓病になつて寝たつきり。山田さんは子供が四人ある。總領の敏夫君が、去年高等を出たばかりだが、近所でも評判の孝行者店の仕事からお父さんの看病、ちいさい弟たちの世話までひとりをやつてゐる。これを見て、大木姉弟は大變同情した。感心した。敏夫君はふさ子さんと、小學校時代同級なばかりでなく、毎日御用きゝに来て、顔を合せてゐるから、山田さんの一家が困つてゐることはよく知つてゐる。で、お氣の毒だから、山田さんのお家賃をまけてあげて下さいと、お父さんにお願ひすると、お父さんはニコニコしながら、

『まけてやるにもなんにも、山田さんが病氣になつてから、まだ一錢だつてもらつちやをらんよ。毎月無理して敏夫君が持つてくるが、わしは絶對受取らん。敏夫君が一人前になるまで、家賃は延期ぢや。』  
家賃どころか、お父さんやお母さんは、これまで何くれとなく山田さん一家に

温かい手をさしのべてゐたのだつた。

これをきいて、ふさ子さんは、家のお父さんなかくえらいと思つた。

『お父さん、ありがとう。』

『ハ、ハ、ハ、ハ。』

お父さんは嬉しさうに笑つてゐる。

で、姉弟はいろく相談して、暑中休暇の間だけでも、ふたりで働いて、そのお金を敏夫君のお父さんにあげやうと、お父さんに伺ふと、

『働くつて何をやる！』

『うちの花をうりますわ。』

『なるほど、そんならお前たちにも出来るね。よろしい。わしは賛成ぢや。』

かうして姉弟は新宿の街へ立つことになつたんだが、それから廿日あまりたつてから、恐しい災難が姉弟の身にふりかゝつた。



## 毒蛇の眼



『花は全部かふから、ちよつと顔をかしてくれ。お金をはらふから。』  
さういふ男のあとから、喜んでついて行つた姉弟は、やがて、薄暗い露路にひ  
つぱりこまれた。

『ア！』危険を感じて、逃げださうとした時にはもうおそい。物蔭から飛び出し  
た男がいきなり姉弟にパン／＼と平手打ちをくはした。

『聲を出すよこれだぞ！』

内ポケットから短刀をちらと覗かせたのは、二十七八の眼のすはつた男である  
あまりの怖しさに姉弟は口もきけない。

『誰にことはつてあすこで花をうるんだ？』

『誰にもことはらないんですけど、悪いならやめますわ。』  
泣き出したのをこらへて、ふさ子さんがいふと、

『アタポーよ。こゝいらはおれの縄張りだ。手前たちに勝手な真似をされてたま  
るもんか。いくらある。けふの賣上げを出してみろ。』



ふさ子さんは不運にも十日あまりの賣上げを全部とられてしまった。そのあげく、姉弟の學校から住所をきいて

『警察へ届けたりすると、命がないよ。それから明日も出て来い。これから毎日出てくるんだ。賣上げの半分はもらふぜ。』

なんとといふ恐しい男だらう。それから前の場所に歸つてから。となりの似顔繪かきにきくと、その無頼漢は毒蛇のやうに怖れられてゐる親分で、不良の三十人も子分に持つてゐる。まあ、見込まれたが災難ですねと、氣の毒さうにいふ。とんでもない人に見込まれてしまつたものだ。こんな恐しい街へ来るのはいやだけれど出なければ出ないで、又どんな因縁をつけるかもわからない。そのために學校から住所もきいたんだ。あゝどうしたらよからう！

姉弟がぼんやり考へこんでゐると、

『なんだ、元氣がないな。』

快活な聲がして、近づいて來たのは、白地の單衣に袴をつけた三十五六の男

だ。背は高くないが實にいゝ軀をしてゐる。

『今晚は。』

姉弟は思はずニツコリした。何をしてゐる人か知らないが、三日に一度ぐらゐこゝを通りかゝり、そのたびに花をかつてくれる客だつた。口髭をきれいに生やし目の冴えた美丈夫である。

『その邊でお茶でものまないか』

やがて、三人は附近の喫茶店にはいつた。意外なことに、その客は、姉弟の身の上をよく知つてゐるのだ。敏夫君のことも知つてゐる。

『敏夫君の店は僕の近所なんだよ。敏夫君を助けるために、君らが花賣りをしてゐるときいてぼくは感心した。でなけりや、花なんぞ僕は買はないよ。柄でもないからね。ハ、ハ、ハ、ハ。』

太い聲で笑ふのである。

『あなたはどなたですか？』



『林といふんだ。けふは何かあつたのかね！ かくさずに話してみたまへ。』  
それから姉弟はかいつまんでいふと、

『悪い奴だな。よし／＼、僕にまかしておきたまへ。明日の晩、知らん顔をして出てゐるんだね。奴が来たら僕が出てやるよ。』

『でも、とても強いんですつて。子分が大勢あつて。』

紳士はたゞ笑つてゐる。その笑ひ方になんたか凄味があつて、どうもたゞの人ではないらしい。これはどこかの親分ぢやないかしら！と姉弟は考へた。

### 泥棒待て

その翌晩、姉弟がいつもの場所ではなをうつてゐると、お仕舞ひ頃になつて、例の無頼が二人の子分をつれてやつてきた。

『いくらうれた！』

『一圓と少しです。』

『よし／＼、けふは五貫にまけておいてやらう。』

圖々しい奴である。この手で全部の夜店をまはつたら、大した商賣だ。林さんとかいふ方、昨夜はあんなことをいつてゐたが、どうしたらう！ やはり怖いから来ないのであるまいか！と思つてゐると、

『おい、泥棒、ちよつと待て！』

みると林さんだ。泥棒といはれて、親分は眞赤になつて怒つた。

『ふざけやがると承知しねえぞ。おれをなんだと思つてやがるんだ！』

『泥棒だと思つてる。泥棒を泥棒といふのになにがふしぎだ！』

たちまちまはりは黒山の人、その中には眼付の凄いのが澤山混つてゐるが、林さんは一向平氣で、

『それでも貴様らの商賣があるのか。六法全書にのつた營業か！』

『生意氣な！ やつちまへ！』

二人の子分がいきなり拳をふりあげたが、次ぎの瞬間、もんどり打つて舗道に



叩きつけられてゐた。

『やつたな！ 子分の仇だ！』

キラリ懐から物騒なやつをひきぬいたが、これもたちまちのうちに、叩きつけられてしまふ。

まるで段がちがふのである。見物はあまりの早技に開いた口がふさがらない。そこへ背の高いお巡りさんが駆けつけてきた。

『どうしたんだ！』

親分はペコ／＼しながら、

『旦那、この野郎があつしのことを泥棒だとぬかしやがつてね、へい、喧嘩をうりかけやがつたんですよ。』

ひよいと林さんをみた警官、がびつくりして敬禮した。

『やッ、これは先生ですか。……これ、貴様はこの方をどなたと思ふ。警視廳の林先生だぞ』

『へえ！あの有名な林先生！』

『先生に喧嘩をうりかけるとは貴様もヤキがまはつたぞ。本署に來い！』  
日頃から睨まれてゐる暴力團だから、そのまゝ暗いところへポーンと抛りこまれてしまつた。

林金之助（假名）は講道館七段、名人三船八段の秘藏弟子で、若い頃はあまり切味が凄いのので村正金之助といはれた天才柔道家、警視廳柔道部の最高師範である。姉弟はどんなに驚いたらう！ どんなに喜んだらう！ 姉弟の友情、林先生の義侠的行爲は、美しい實を結んで、八百屋の孝行息子や町内の人を感激させたのである。  
(をはり)

# 梅干先生と海軍大尉

老 先 生



『いくら悪口をいつたつて、そんな亂暴しちやいかんね。怪我でもさせたら、どうするつもりぢや。』  
羊みたいに柔和な眼を、しよぼくさせながら、田畑先生はデロリく老眼鏡  
ごしに健を睨みました。

朝の校庭、授業には未だ間があるらしい。生徒たちはあちこちにかたまつて、  
事件の成行きを見守つてゐます。

『僕の悪口ならがまんします。お母さんを馬鹿にしたから撲つたんです。』

さう叫んだ白川健は、十四五のきかぬ氣らしい少年です。

『馬鹿になんかしねえやい』

つき仆されて、泥だらけになつた山岸は、先生のうしろからペロリと赤い舌を  
出しました。この町指折りの金持の息子で、成績は健と一、二を争ふほどよかつ  
たが、生意氣なのでみんなから嫌はれてゐました。今朝、健の顔を見ると、彼は  
かういつたのです。



『さう、君のお母さんにあつたぜ。』



健の顔色が少し變りました。

『驛の前にゐたよ。色の黒い女だろ。入學式の時見て知つてゐるんだ。』

驛前の廣場にこの地方名物の林檎賣りの女たちが並んでゐますが、健のお母さんもそのひとり。それを山岸は上手にまねて、生徒たちを笑はせました。

『林檎はいらんかねえ！ 安い林檎、うめえ林檎！ え、くさつた林檎！』

とたんに健は山岸に躍りかゝつて撲りつけたのです。

『どんな理由があるにせよ、亂暴はいかん。さきに手を出した方が悪いのぢや。』

白川、山岸にあやまんなさい。』

健は唇をかんでゐます。

『何故だまつてるんぢや。あやまんなさいといふに。』

突然、健は腕で顔をおうて泣き出しました。それをじつと見て居つた先生は

『山岸は一体、何をいふたんぢや。』

『なにもいひません。』

山岸はやく／＼馬鹿にしたやうに先生を見てゐます。この私立學校の有力者で、先生の間にもで勢力をふるつてゐる父を持つた山岸は、氣の弱いみすぼらしい漢文の老先生を頭からみくびつてゐるのです。

田畑先生は、口をもぐ／＼させて、なにかいひかけましたが、ふつと弱々しく目をそらすと、

『喧嘩なぞこれからしちやいかんぞ。生徒は兄弟同様ぢや。みんな仲よく勉強してくれ。なあ、わしは頼むぞ。』

とぼ／＼職員室の方へ立去る老先生のうしろから、山岸は又赤い舌を出して、みんなを笑はせました。

親子鳥

『もう起きんとおそいよ、健。』

『うん、うん、、、』昨夜の宿題で、目があきません。



『そんならお母さんだけいつて来ようか。四時をすぎたからね。』  
『いや起きます。』

家から三キロあまりある青物市場へ、林檎の買出しに行くのでした。母思ひの健は母に少しでも樂をさせたいといつも一しよに行くのです。

十月にはいつたばかりなのに、北海道の夜明け前の空気が身にしみて寒い。もじり外套に地下足袋といふ、男みたいな服装をした母は、寒さうに涙をすゝりながら車の仕度をしてゐます。

父は數年前亡くなつて、母子二人の貧しい生活、この春、健が中學へはいるといまゝでのやうに、お針仕事だけでは、たうてい子供の學資が出ないので、毎日常なれぬ車をひいて、林檎賣りに出る母でした。世の中に子を思ふ母心ほど尊いものはありません。

(この子さへ一人前になつたら！)

さう思ふとどんな辛い仕事も苦になりません。ありがたいことに、健は先生も

舌をまくほど頭がいゝ。このまゝ曲らずにのびたらえらいものになるだらうと、みんないつてゐます。

青物市場へ行く途中、健はふいに立ちどまつて、

『お母さん、おれ、新聞配達をして學資かせぐから、林檎賣りやめておくれよ。いまゝでこんなことをいつた事がないので、母は吃驚して、

『どうして又、急にそんなこと。』

『おれ、少し考へることあるんだ。』

『なんだかお母さんにはちつともわからない。お前この頃學校に行くの氣の進まん様子だが、なにかあつたかい。』

『……………』

『かくさずに話してごらん。きつとなんだろ、お母さんがこんな恰好して、林檎賣りなんかしてるもんだから、誰かに馬鹿にされたんだろ。』

『……………』



『だけど健よ、そんなこと氣にやむことはないよ。どんな商賣しようも、人様の物を盗みごまかすわけぢやなし、恥かしいことなんかちつともない。』

『……………』

『そらあお前もいやだろさ。こんな貧乏なお母さんを持つたのが、お前の不運なんだもの。お前のポロ服をみるたびに、お母さんはいつも腹で泣いてるよ。』

健は涙をみせまいとして横をむきました。

『辛抱しておくれ、健よ、お母さんはお前のためなら、たとひ乞食したつていよ。だからなあ、新聞配達なんかする時間があつたらさ、もつとく勉強して、早くえらくなつておくれ。』

『すみません、お母さん。』

母子は抱き合つて泣きました。どこかで鶏がないてゐます。太陽のあがるのもちぎでせう、東の空がバラ色にそまつて來ました。

倉青

蛙

健は猛烈にがんばりました。そしてずつと首席でとほし、四年になつた時には平均點九十八點といふ、學校のレコードをつくりました。體操だけが悪い、それは健が、體操なんかなんになるといつて、怠けてゐるからです。

成績はいゝが、先生のうけはあまりよくありません。非常に負けず嫌ひな性質で、間違つたことをいふと、先生でもなんでもどん／＼つっこむからです。

校長はひそかに心配しました。

『あまり頭のいゝのも考へものだ。いまに間違ひを起さなければよいが。』  
とにかく健は學校の英雄でした。いたづらもはげしい。山岸などは健の前に出ると小さくなつてゐます。

夏のある午休み。四年の教室の黑板の前で、大勢の生徒がワイ／＼いつてゐます。黑板一ぱいに、田畑先生がお辨當をたべてゐる漫畫がかいてあり、その横に



(梅干が梅干たべる午休み)

梅干は田畑先生の綽名です。なるほど先生の箸のさきに丸いものがのつてゐます。梅干のつもりでせう。職員室をのぞきにいつた生徒が、笑ひながら戻つてきて、

『ほんとだ〜。梅干たべてらあ。』

『あいつのお菜はいつも梅干なんだぜ。』

その時鐘がなりました。

『この漫画どうしよう、白川？』

『ほつとけ！』

田畑先生がよぼ〜はいつて来ました。

クス〜と笑聲が教室一ぱいに起りました。教壇に上りかけた老先生は、始めて黒板に氣付き、眼をパチ〜させながら見てゐましたが、

『いかん、こ、こ、こんないたづらはいかん。』

あはて、消しはじめました。

生徒たちはどつと笑ひ崩れました。

『騒いぢやいかん。これ、これ……』

それは何ともいへない悲しげな、哀れみを乞ふやうな眼付で、さすがにみんなしーんとなりました。

『君らも知つてるやうに、わしは貧乏ぢや。わしは早く妻と子を失つて、いま弟の家に世話になつてるが、この弟もわし以上の貧乏人で、おまけに子供がたくさんある、わしの月給なんかとてもたらん。』

齒のない口をあけて、笑ふつもりだつたらしいのですが、その表情は急に悲しげにくもり、下をむかれると、ポロリ光つたものが落ちました。

『ふん！』

健は鼻でわらひました。はげしい性質の健は、卑屈ともみえる弱々しい先生の態度が、自分の不幸な境遇とひきくらべて、がまんが出来なかつたのです。むろ



ん、その漫画は健がかいたのでした。先生はそれを知つてゐられたが、だまつて  
ゐました。

(不幸な子だ！)

先生はさう思つてゐるのでした。

それから一月ほどして、健はまた

一騒動起しました。その時

は意地の悪い氣持でなく、

ほんのいたづらのつもりだ

つたのですが――

青蛙を一びきチヨーク箱

にいれておいたのです。そ

いつが蓋をあけたとたん、

ビヨンととびだした時、田



畑先生の狼狽ぶりといつたらあり  
ません。

『あゝ、あゝ、あゝ………』

眞青になつて廊下に逃げだしました。

(しまった！ 梅干は蛙が大嫌ひだつたんだ。)

さう健が思つた時、

『なにを騒いどる！』

體操教師がはいつて來ました。

### 反抗兒

『白川、もつと前へ出る！』

體操教師は憎々しげに健を睨みました。

『貴様は實に怪しからん ちつとばかり成績のいゝのを鼻にかけて、その態度は



なんだ。教師を教師とも思つたらん。貧乏人の子供はどうもひねくれていかん。』  
健はキラ／＼眼を輝して、體操教師をみつめました。貧乏人！ その言葉は  
百の鞭よりも強く彼の心にひびきました。氣にいらないうすぐ撲りつける軍曹上  
りのその教師に、健は日頃から反感をもつてゐたのでした。

『貧乏人がどうしたんです。』

『なに、貴様！』

『パバン！ 健はよろめきました。』

『先生、撲らばくともいゝでせう！』

『なにくそ、この横着者め！』

『なにが横着者です。先生、先生のいふことだつて……』

『なに、なに、なに……』

『ア、痛ッ！ どうしてぶつんです！』

『貴様、おれに反抗するの！』

『反抗しません。撲る理由をきいてるんです。』  
『やかましい！』

『まあ／＼……』

田畑先生が仲にはいりました。

『白川、先生にむかつてなんといふことだ。先生、喜多村先生、まあ／＼、お腹  
も立ちませうが、わしにまかして下さい。』

『いや、駄目です。おい、白川、不良少年、校長室へ来い！』

輝く日

それから十年の星霜が流れました。

その頃、S市北海新聞に、次のやうなニュースが掲載されました。

（當市北洋中學出身の海軍大尉白川健氏が、この度海軍大學を首席で卒業、恩  
賜の軍刀をいたゞいた。白川大尉の母堂は林檎賣りまでして同大尉を教育された



賢母、このたび母堂を伴ひ歸省される。

晴れた五月の午後でした。

今しも中學校の門前に、一台の自動車をとまつて、その中から凜々しい海軍大尉白川健が、紋服の母をいたはりながらおりてきました。

學校の前には全校生徒が並んでゐました。

おゝ、なんとといふ晴がましい光景でせう！

貧しい林檎賣りの子白川健は、海軍兵學校へはいる時から、大學を出るまでづつと一番といふ素晴らしい成績で、未來の大將を約束されて、今や母校を訪れて來たのです。

やがて、校長室へ案内された白川母子。

『田畑先生がおみえになりませんが。』

『田畑先生は三年前に亡くなられましたよ。』

白川大尉はふと、校長室の壁にかゝつてゐる田畑先生の寫眞をみつけました。

『お亡くなりになつたのですか？』

『さうです。ほんとに氣の毒なお方ぢやつた。りつばな學識を有しながら、あまりみとめられずに、不幸な一生を終へられた。愚痴一つはすによく出來た方でした。あんななんかも、する分先生を困らした方ですなあ、』

白川大尉の胸に十年前のことがなつかしく浮び上つて來ました。

『今だからいひますが、あなたが四年の時、退校になりかけたことがありましたね。』

『ハア？……』

なにをいはれるのかと、大尉も母堂も、めつきり老けられた校長先生の顔をつめました。

『あの時、退校にならなかつたのは、誰のためだと思ひます？』

『校長先生が許して下さつたと田畑先生に伺ひましたが。』

『ちがひます。それは田畑先生です。職員は全部あなたの退校に賛成しまし



たが、その時田畑先生はたつたひとり、強硬に反対されたのです。白川は貧乏人の子だ。わしも貧乏だ。貧乏人の氣持は貧乏人でないとわからん。白川がひねくれてゐるのは、貧乏がさせたのだ。いまあの子を退校させたら、どんな悪いものになるかわからん。あの子の出世を唯一の希望にして生きてゐる母のことを考へてやつて下さい。どうしても退校させると仰言るなら、わしも責任をもつてやめると、それは別人のやうな強硬な態度で、たうとう押しきられたのです。』

『校長先生、それを何故あの時仰言つてくれなかつたのですか!』

白川大尉の眼に涙が光つてゐた。

『少しも知りませんでした。せめてお亡くなりになる前、それが判りましたら、どんな都合でもして、歸つて來たのです。私は先生にすまないことをした……』

白川大尉は、つと立上ると、田畑先生の寫眞の前に進みました。

『先生!』

老先生は柔和な微笑を浮べて、じつと白川大尉をみつめてゐます。

『先生! 今歸つて來ました!』  
白川大尉の頬を熱い涙がポロ／＼と流れました。  
母堂はさつきからむせび泣いてゐます。  
白川大尉が、恩師田畑先生の銅像をたてるため發起人となつて、その趣意書を各卒業生にくばつたのは、それからまもなくでした。  
その時イの一番に賛成して、少なからぬ金を出したのは、いまこの町の銀行の重役をしてゐる山岸一夫でした。

(をはり)

### 尊いかな母の愛

洗濯婆さんと息子

『生徒さん、洗濯物ないかねエ』



洗濯婆さんのお筆さんは、けふも大きな籠をかゝへて、寄宿舎の部屋々々をまはつてゐた。

洗濯婆さんといつても、まだ四十あまりだが、中學の生徒達はさうよび慣れてゐた。

貧にやつれた、白髪まじりの汚らしい姿は、いかにも、洗濯婆さんと叫ぶにふさはしいのだ。

『おう婆さん、こいつをたのむよ』

生徒の一人が、元氣な聲と共に、ぼんと廊下にはうり出したのは、汚らしくよごれたシャツだった。

『婆さん、それ急いでやつてくれよ。かはりがないんだから』

『はいくかしこまりました』

お筆さんは、それを拾ひあげると、籠の中へ入れた。

『洗濯物ないかねエ』

さういひながら、次の部屋の前まで来た時、お筆さんはつと立止つた。

『敏一』

部屋の中では、二三人の生徒が寝そべつて、アンパンかなにかを食べながら、ひそく話し合つてゐたが、その聲にふりかへつた。柔道部の野田、剣道部の山崎、いづれも札つきの不良生徒である。その中に、お筆さんの一人息子の筒井敏一がまじつてゐる。なまいきらしく制服のえりをはだけ、帽子を横ちよにかぶつて――。

敏一は中學三年生なのだ。

『敏一や、お歸り』

お筆さんがさういふと、敏一はふくれつ面をしながら立ち上つて、

『ぢや、いゝかい』と、他の者に變な目くばせした。

『うん、八時だったな』

お筆さんと敏一は外へ出た。竝んで歩きながら、敏一は相變らずのふくれつ面



だ。

『敏一や』とお筆さんが遠慮がちによびかけたが、そつぽをむいたまうた。

『おまへ、無断で寄宿舎へ入つちや、いけないぢやないかい』

だが敏一い返事もしなかつた。

お筆さんは、貧しい苦しい暮しの中を、敏一を中學に出してゐるのである。

そして來年は士官學校の試験をうけさせようと思つてゐる。

お筆さんは、寄室舎の洗濯物などしながら、その日の來るのを楽しみにしてゐるのだ。

るのだ。

敏一は幸に、成績だけは至極よくて、いつも一、二番を争ふほどだが、困つ

たことにはひどい我儘者で、柔道も強かつたが、亂暴でも全校一番だ。

お筆さんの心配の種は、いつもそれにあつた。

だが敏一は、いつも洗濯婆さんの母親のいふことなんか、てんできゝ入れよう

ともしなかつた。

『敏一や、このごろ太田さんとの葡萄酒へ、中學生が入つて荒すさうだが…』

…』

敏一はぎくつとしたやうだつたが、それでも、頑固におしだまつてゐた。

『まさか、おまへなんか、かゝはりはないだらうねえ』

『そんなこと、俺知りやしないよ』

敏一は吐き出すやうにいふと、こんどは急に母親の方をふりかへつた。

『それよりお母さん、一たい洗濯婆さんをいつまでつゞける氣なんだい』

お筆さんは、びつくりしたやうに敏一の顔を見た。

『そりや、お前—』

『フン、よぼくの洗濯婆さんまでしてもらつて、なにも俺あ、中學なんか出た

かあないんだからね』

これは敏一が、母をおどす時のいつもの術だつた。お筆さんは、はたしておど

くして、涙ぐんでゐる。



葡萄泥棒

母親のお筆さんが、洗濯物にアイロンをかけてゐた。  
敏一はさつきから時計を気にしてゐたが、八時五分前になると、そそくさと立ち上つた。

『敏一や、どこへおいでだえ』

『友達とこへ、ノートを借りに行くんだ』

敏一はさり気なくいひすてると、外へ出ていった。

敏一の家は運動場のはすれにあつた。だから、約束の柔道場までかけつけるのには、五分とかゝらなかつた。

敏一が柔道場へ着くと、メンバーはみんなもう揃つてゐた。

『筒井、おそかつたな』

山崎がピカリと懐中電燈を光らせながら、近よつてきた。

顔ぶれは、筒井、山崎、野田の他に、野球部の中谷、ボート部の島、以上の五人。いづれも相當な不良生徒ばかり——。

『今晚宿直は誰だい？』

『ギットンさ』

びつこの英語教師のことである。

『あゝギットンか。そんなら大丈夫と——ちや、いかうぜ』

『オーケー』

筒井を先頭に、一同ぞろぞろ押し出していった。

これから、中學の隣の葡萄畑へ、のり込まうといふのである。

『おいみんな、このごろ太田の奴感づいて、番人をおいたつて噂だぜ、氣をつけな』

『大丈夫、投げ飛ばしてしまはあ』

高い垣がめぐらしてあつたが、人馬をつくつて、順々にのりこえた。幸に



闇夜だ。

廣い葡萄畑は、しんと静まりかへつてゐる、これまで數回荒したことがあるので、手探りでも見當はつく。

一同さつそく用意のふるしきやカバンの中へ、もぎとつた葡萄の尻を押しこむ中には、無花果やリンゴをやつてゐる者もある。

これを持ち歸つて柔道場へローソクをともし、盛大なコンパ會をやらうといふのである。

『シッ！』

足音がした。だん／＼近づいて来る。

みんなは地べたへ顔をこすりつけて、闇の向ふをうかがつた。(見つかったかな？)

と思つたが、足音はつい近くまできて立止つた。

サラ／＼と音がする。番人は小便をしてゐるらしい。

『クスッ！』と敏一はふき出しかけたが、あわてて口をおさへた。

足音は又反對の方へ去つていつた。

『しめた！ この間に引きあげやうぜ』

合圖は次々傳へられて、一同は地べたを這ひながら、垣根まで歸つてきた。

順々に乗り越えて、最後に、敏一が悠々と垣へ手をかけてぶら下つた時だつた。

『ウーツ！！』

と闇の中からも凄惨な唸り聲が、電光のやうにとんできたと思ふと、ガブリ！！敏一の足へ喰ひついた。

犬だ！！ 『アツ、痛ッ！！』

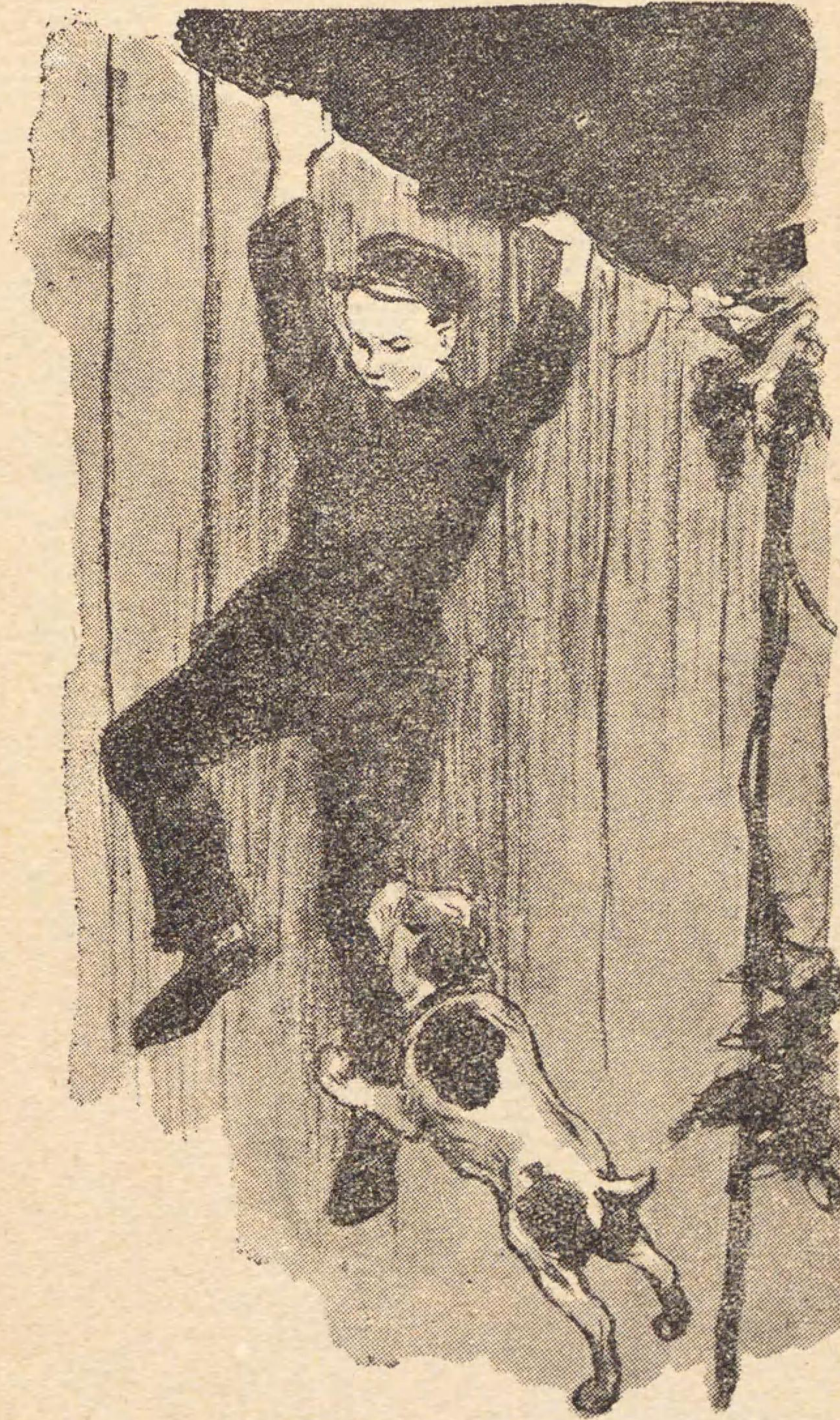
足を振つて蹴はなさうとしたが、だめだつた。ブルドッグらしいその犬は、喰ひついた歯にます／＼力をこめた。

足が感覺を失つて来る。

(しまつた！)と思つた時には、ドタリと引きすり落されてゐた。



「泥棒！ 泥棒！」  
と叫びながら、人がかけてくる。



### 三、わが子の爲に

足に大怪我をして捕つた敏一は、すぐに病院へかつぎこまれた。びつこにはならないだらうといふことだったが、そのまゝ動けなくなつてしまつた。

学校では職員會議の結果、葡萄畑荒しの一味の處分が發表された。無期停學といへば、いつ登校を許されるかわからないし、迫つてゐる學期試験をうけられないとすれば、來春進級出來るかどうかが覺束なかつた。

不良生處分の發表されたその日の夜、校長先生の自宅を訪ねたのは、敏一の母親のお筆さんであつた。

『この度は悴がとんだことをいたしました——』

お筆さんは、校長先生の前へ、両手をついた。

『うむ』



校長先生は、氣の毒なお筆さんの様子に同情された様子だった。

「氣の毒ではあるが、無期停學より他なかつた。敏一君は學科の方はとてもよいのだが、何分にも操行の方があれでは——。とにかく、試験を前にして、困つたことになつたものです」

お筆さんはこの時、靜かに顔をあげた。

「それにつきまして、今晚は折入つてお願ひがございましたので

——」

「といふと、處分を軽くしてくれとでもいふのかね」

「いいえ、さうではありません」

お筆さんはかぶりを横に振つた。

「敏一が停學になつてをります間、私が代りに、授業をうけさせていたゞけませんでせうかと思ひまして——」

「ほう！」

「敏一は、あんな悪い事をしましたのですから、充分にお仕置下さいませしても、少しも不足には思ひません。けれども何分にも試験前、殊にあの子は士官學校志望です。落第されて履歷書の傷にでもなりましてはと——」

聲は涙になつてゐたが、必死の色が顔にあらはれてゐた。

「ふうむ、しかし、失禮だがあなたが授業をうけても、先生の講義がよくわかるかしら」

「それは、とてもよくはのみこめないと思ひますが、私も女學校だけはやつてをりますので、筆記くらゐ、どうやらできるではないかと思ひまして——」。

校長先生はもう御存知かも知れませんが、あの子の父はもとこの町でも一二といはれた金持でしたが、材木會社をはじめると手を出して失敗し、一文なしになつて病死してしまひましたのです。死ぬ時に、敏一だけは一人前の教育をしてくれといひのこした言葉が今も耳にのこつてをります。私は見すばらしい洗濯婆をしてをりまして、あの子をだけは一人前にしてやりたいと、毎日そればかり考



へて、暮してをります』

その言葉も顔色も、お人好しのいつもの洗濯婆さんではなかつた。深いく母性愛に泣きぬれた母親としてのお筆さんだつた。

『ふうむ』

校長先生は、大きな感動の吐息をもらされた。

『よろしい。あなたの申し出を許しませう』

『えつ、お許し下さいますか。有がたうございます』

お筆さんは、涙をぼろ／＼こぼしながら、頭を畳へすりつけた。

母の愛

敏一が、明日は退院できると決定した日の午後、やうやく二週間の停學期間のあけた野田や山崎といふ連中が、病院へ見舞ひに來た。試験のはじまる二日前だつた。

『よう、とんだ災難だつたなあ』

お互に顔を見合せて、苦笑した。

『だが筒井喜べ、君もどうやらお詫びがかなふらしいぞ』

しかし、敏一は相かはらず強情をはつてゐた。

『へッ、俺アなるべく停學の長い方がいいよ。學校なんてくそ面白くもない』内心は實はさうではなかつたのだが……

『おい／＼、そんな呑氣なこといつてられないぞ。君一たいお袋さんが、どんなに心配してるか知ってるのかい』

『お袋がどうしたんだい？』

『君のお袋さんて、いつもは洗濯婆さん洗濯婆さんていつてたが、俺あ感心しちまつたよ。君が停學になつてからつても毎日、君のかはりに授業に出てるんだぜ』

『えッ、なんだつて？』



そばから山崎が引きとつて、口をはさんだ。

『俺あ今日はじめて學校へ出て見て實さい泣けちやつた。クラスが一番うしろの隅つこへ席をおいて、君のお袋さんが、一生懸命筆記をしてるぢやないか。授業がすめばまた籠を抱へて、寄宿舎まはりよ。そしてね、生徒達が勉強したり、運動したりするのを見て、時々涙をこぼしてゐるんだよ。それを知らねえとは、筒井敏一、するぶん親不孝者だなあ』

敏一の顔が急に蒼白になつた。

バラ／＼と大粒の涙をこぼしたと見るまに、毛布をひつかぶつて、寢臺の上へころがつてしまつた。誰が何といつても、返事をしようともせず、齒をくひしばつて、泣く聲が、毛布の下からもれるばかりだつた。手持ぶさたになつたみんなは、やがて歸つていつた。入れちがひに、あたふたと籠を持つたまゝかけこんできたのは、お筆さんだつた。

『敏一や、敏一や、お喜びよ、停學が許されたんだよ』  
だが、毛布の下から聞えたのは、泣き聲だつた。

『おや、この子はまあどうしたんだよ』

とつぜん毛布がパツとはねのけられると、

『お母さん！』

と叫んで、敏一が母の手へしがみついた。

『お母さん、僕が悪かつた、許して下さい!!』

X

X

X

母親のお筆さんが、苦心しながら先生のいはれることを書いたり、他の生徒のノートを寫したりした筆記は、實際あまり役にたつなかつた。

女學校で教はつたといつても、もう二十年以上も前のことだし、何しろ中學生の英語や數學は洗濯婆さんにはむつかしすぎた。

けれども、その苦心して書いたらしい、まづい英語や方程式の文字が、敏一の



心をどれほど鞭うったことだらう。

敏一は、徹夜の勉強をつづけながら、母の深い愛を思つて、何と泣いて筆記帳をよごしたかしのなかつた。

敏一は、頭は非常にすぐれた子だったので、學期試験も、優秀な成績でをへる事ができた。

敏一はその後めでたく士官學校へはいつた、今は國家の干城として國防の第一線に立つてゐる筈だ。

(をばり)

### 輝く友情

悲しき別れ

『まだ歸りませんか？』

笠置山は恐る／＼きいた。

『馬鹿なことをいふな。お前の稽古はこれからだ』  
能登ノ海は恐い顔をしていつた。

早稲田大學の角力部の土俵。

笠置山はその頃まだ學生で、出羽の海部屋から、早大へ通つてゐるが、大學の角力部の師範は、やはり出羽の海部屋の先輩能登ノ海だつた。

彼は、笠置山に猛烈な稽古をつけた。他の選手にはやさしいが、笠置には笑顔一つみせない嚴格さ。

二人は一しよに兩國へ歸つて來た。

『寛治（笠置山の名）。お前はこの頃おれの顔をみると、妙な顔をしとるが、なにか怨んでゐるのかい』

『いゝえ』

いゝや、おれはよくわかる。嘘をつくな。お前は學校出たら角力になるつもりだ



つたな？』

『ハイ』

『角力にはなれんぞ。そんな心掛けでは』

『さうですか』

寛治はむつつり答へた。

『本當の修業といふものは、お前が考へてゐるやうなやさしいものぢやない。學生はいはゞ道樂にやつとるのだが、お前のはさうでない。角力で身を立てやうと思つたら、もつとしつかりやれ。それがいやなら、角力などはあきらめろ』

笠置山は泣けて來た。始めて能登ノ海の氣持がわかつたのだ。それから彼を本當の兄のやうにたよつて、修業してゐたが、そのうち例の天龍一派の協會脱退騒ぎが始まつた。

能登ノ海が、天龍と行動を共にするときいて、誰よりも悲しんだのは、いふまでもなく、笠置山だつた。

彼は泣いて引とめたが、

『行く道は別々でも、角力道に生きるといふことには變りはない。おれがゐなくなつても決して怠けるなよ。一日も早くりつばな關取りになつてくれ。二度とお前の角力を國技館で見れんのは残念だが、しかし、寛治、おれはどこにゐても、お前の角力は見えてゐるぞ』

『ハイ、でも、手紙は下さい』

『うん。お前もくれよ。身體を大事に、しつかりやつてくれ』

二人は手をととりあつて泣いた。かうして別れてから數年、二人は會ふ機會とてなかつたが、たがひに手紙をやりとりし、能登ノ海の便りは、いつも、寛治よ、早くえらくなつてくれ、そればかり書いてあつた。

涙の電話



昭和十年の春場所だ。

俄然、笠置の奮闘は目ざましかつた。初日からづつと勝ちつゞけて、早くも入幕候補の噂がたつた。

『笠置はえらい！』

『あの角力はいまに三役までいくぞ』

力士として、大きい

方ではないが、いかに

も合理的な、そして稽

古のつんだ取口は、こ

とに彼が角界唯一人の

大學出であるだけ、一層

人気はたかまる一方だつた。

これを第一に喜んでゐるのは、



大阪にゐる能登ノ海にちがひ

ないのだが、どうしたのか、

五日目、六日目となつても、

大阪からは何の便りもない。

『いつも勝てばすぐ喜びの電報

をくれる能登關こんどばかりは葉書

一枚もよこさん。どうしたんだらう？病氣ぢや

ないかしら？』

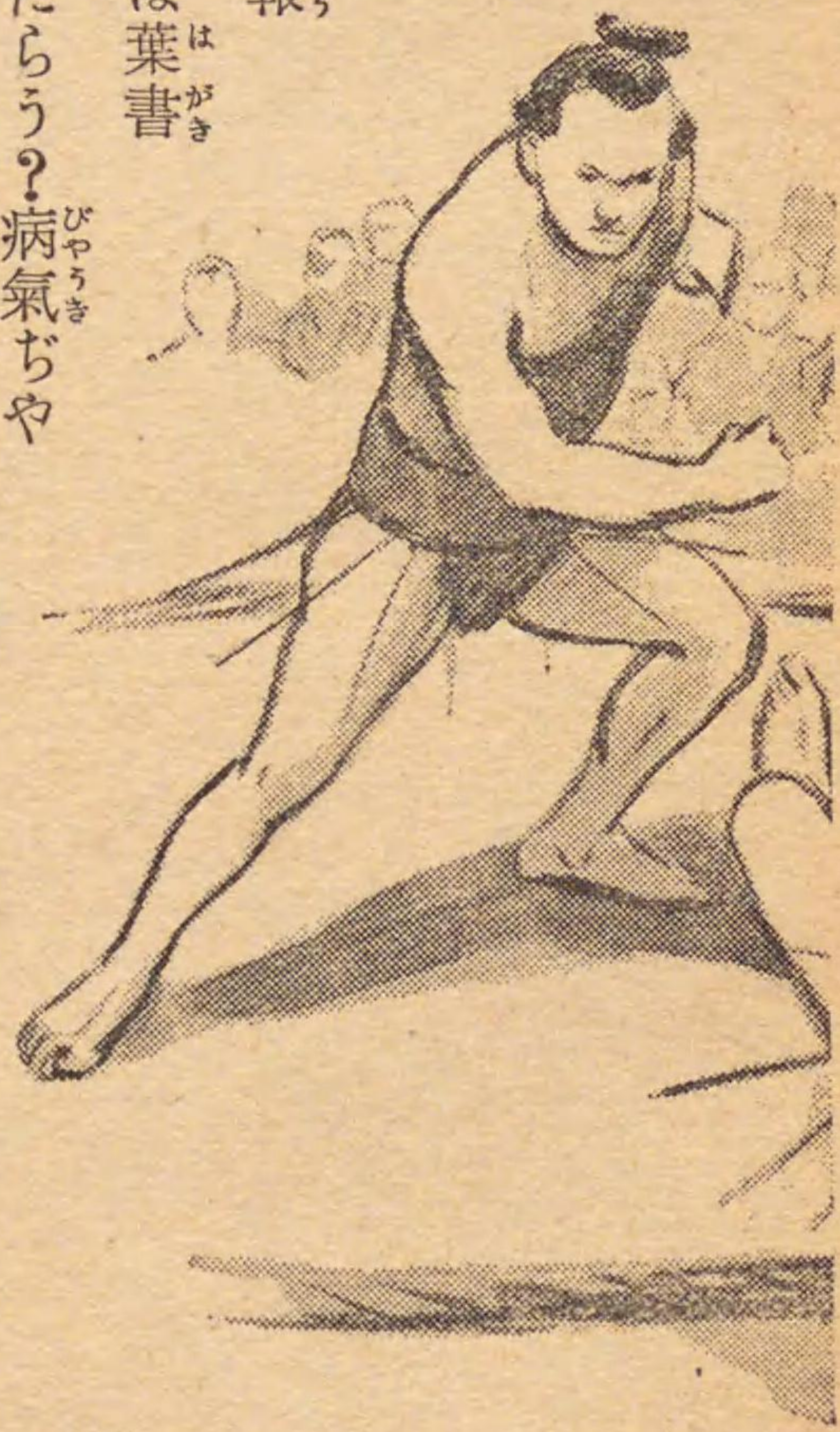
笠置は、心配でたまらなかつた。

彼はつひに十一日勝ち通した。そして、入幕した。その千秋樂の日である。國

技館から出羽の海部屋へ、凱旋將軍の如く引きあげて來た彼へ、リリリツと電話

がかゝつて來た。

『お目出度う、關取り』





その聲は、能登ノ海の伯母である。

『有難うございます。お蔭さまで全勝させていたゞきました』

『ほんとによかった。わたしはもう嬉しくて嬉しくて……』

なんだか、泣いてゐるやうな震へ聲である。

『ときに、能登關はどうしたのでせう。なにか變つたことが、出来たのではありませんか。心配してゐるのです』

『甥はね、わたしの家に来ますよ』

『え？ 今ゐるんですか？』

『こゝにゐます。こゝで泣いてゐるんですよ。電話に出れないのよ』

伯母の聲はつひにすすり泣きに變つた。

『いつ出ていらつしたのです、大阪から？』

『三日前ですよ。心配で、ちつとしてゐられないつて、大阪から来ましたかね、せつかく好成绩がつゞいてゐるのに、おれが行つて、氣が動いてはいかんといつ

て、我慢してゐたんです。甥も、國技館の前には、何度も行きましたよ。家にもちつとしてゐられないんです』

受話器を握りしめた笠置の双眼から、涙が瀧のやうにあふれた。

能登ノ海は脱退の身である。國技館には入れないのがわかつてゐても、笠置の奮闘振りを相像すると、我慢出来ずに、人目を忍んで、何度も國技館の前に来たといふのだ。

『能登關を出して下さい！ 伯母さん！』

『駄目ですよ。子供みたいに泣いてゐるんだもの、あんた、來られないの？』

『行きます！ 行きます！』

電話をきるや否や、笠置は、ひいきの客の招待をみんな断つて、いきなり表へ駆け出した。

彼を乗せたタクシーは、能登ノ海の伯母の家をさして飛んだ。  
家の前に停ると同時に、玄關からころがるやうに出て來た能登ノ海。



『お、寛治！』

『能登關！』

二人は手を握りあつて、涙のあふれる眼と眼をちつと見合せた。

『お目出度う！よくやつた！』

『これもみな能登關のお蔭です。御恩は一生忘れません』

『なにをいふんだ。他人行儀に！ そんなこといふとおれは恨むぞ』

『ハ、ハイ……』

笠置は又新らたな涙にむせんだ。

二人の美しい姿を見ながら、能登ノ海の伯母も、家内中の人もみんな泣いてる。

やがて、奥座敷で、昔をしのび、今を語り、愉しさに盃をあげてゐる二人であつた。

(をはり)

# 善行はかくれず

陽春四月、しかもうららかに晴れ上つた日曜日といふので、銀座通はそぞろあるときの人の波ににぎはつてゐた。

わけても各百貨店は押すな押すなの大入満員だ。

銀座三丁目の×屋百貨店も、買ふ人買はぬ人で混雑をきはめられたが、六階の食堂入口で陳列棚に見入つてゐた子供づれの紳士が、

『あッ、あッ！』

と突然驚きの聲をもらした。

何ごとかと思つて人々がふりむくと、紳士に手をひかれたまた二つ三つと思はれるヨチヨチあるきの男の兒が、ワツと聲をあげて泣きだした。どういふわけかおむつをしてゐないらしく、きれいにはき清められた床の上へ、しこたま大便を



してしまつたのである。

紳士はさすがにまつ赤になつたが、どうすることも出来



ず、たゞおろ／＼と子供を抱き上げる。

場所が食堂の前だけに、人々は眉をひそめた。中にはクス／＼と笑ひ出すもの面白半分にながめてゐるものもある。

と、その時、何處から走り出て来たこの店の少女店員が、何か白いエプロンのやうなもので、いきなり床の上の汚物を拭きとるとサツと、身をひるがへして事務所の方へ消へてしまつた。

それが實に一瞬間の出来事だつたので、紳士は禮をのべるひまもなかつた。『有難い。何といふ感心な店員だらう、わしに恥をかゝせまいとして、聲もかけずに行つてしまふなんて』

紳士はホツとすると同時に、今の少女への感謝の氣持でいつぱいになつた。それから間もなく、紳士の姿はその百貨店の重役室へあらはれた。この紳士はある大銀行の營業課長をつとめてゐる天野三郎といふ人物で、×屋百貨店の重役とも顔見知りの間からだつた。



天野氏はその日休日なのを幸ひ、この頃やうやくあるけるやうになつた長男の等ちやんを、女中におぶはせて遊びに出たのだが、ここで女中に買物をさせてゐるうち、あんなことになつてしまつたのである。

『お店のおしこみもいいのでせうが、實にどうも感心な女店員さんです。これはおかげで私が恥をかゝすにすんだ心ばかりのお禮です。どうかお手數でもあとでおしらべになつて、あの方におわたし下さいませんか』

天野氏がさういつて重役の前へさし出したのは、紙に包んだ十圓紙幣二枚だつた。

×屋百貨店には十六七才から二十二三才までの女店員が二千人近くもゐた。この中から天野氏のいふ女店員をさがし出すとはなかなか一と仕事だつた。

重役は先づ終業後、この女店員達を店内の講堂へ集め、

『皆さんにお集り願つたのはほかでもありません。實は皆さん方の中に、今日あるお客様に大變感謝された方が一人をるのであります。これは店としてもまこと

に喜ばしいことであり、なほその方がお禮にといつておいていかれたものがありますから、いまお話する御當人は申し出て下さい』

かう前おきして、今日の出来ごとをあらまし話したが、誰もそれが自分だといつて申し出るものはない。

『さア、何も遠慮せんでもよろしい。はづかしいことはないのですから、進んで名のり出て下さい。』

重役はかさねてうながした。

だが、やはり返事はないのだ。三度うながしても同じことだつた。重役はムツとしたやうに聲をあげまして、

『なぜだまつとるんですか？ わたしは當店の専務として皆さんに命令します。

それとも名のれないのは、何か身にやましいところがあるからですか？』

すると、その時、後の方で立ち上つた一人の女店員が

『わたくしでございますが、べつに身にやましいことはございません』



と小聲ながらしつかりと答へた。

重役は急に顔をやはらげ、

『よろしい、ではあなたとけちよつと残つて下さい。皆さんは御苦勞様でした。

皆さんも今後とも、お客様には親切をモットーとして、ますます店のためにつく

して下さるやうお願いします』

と一同をかへしてしまふと、たゞ一人残つた少女をよびよせ、今日の善行をほ

めたたへた。

『いえ、わたたくしはお固りだらうと思つてしたゞけですの。べつにほめて

いたゞくほどのことではございません。それでさつきもだまつてをりました』

少女はかへつてはづかしさうにさう答へるだけだつた。眼鼻立ちのとのつた

美しい顔立ちで、年は十六才、安藤文子といふつい近頃入つたばかりの女店員で

ある。

『なるほど、だがその何でもないことがなかなか出来ぬものだ。とにかくこれは

あのお客様のお禮心だ、まア有難くいたゞいておきなさい』

重役はむりやりに、二十圓の紙包みを文子さんの手ににぎらせた。

文子さんの家は太井町瀧王子といふところにあつて、持病のぜん息でねたきり

の父と幼い妹二人との四人ぐらし、とても×屋百貨店でもらふ給料だけでは足り

ないため、店がひけて家へかへると、毎夜二時、三時ごろまで製本の内職をつゞ

けてゐた。

十六七の少女といへば、きれいに着物を着たいし、たまには映畫や芝居もみた

い年ごろである。ことに百貨店のやうなはなやかな場所ではたらいてゐる文子さ

んだつたが、まるでそんなことにはわき目もふらず、父と妹達をやしなふのに

一生けんめいなのだ。

『感心な娘さんだ。百貨店なんかへつとめてゐる子にしては今時めづらしい』

近所の人々はさううはさし合つてゐた。

×屋百貨店では、間もなく文子さんをばつてきて、食堂の給仕監督とし、給



料も今までの倍ぢかくに上つた。

これはいふまでもなく、文子さんの善行にかんげきした重役のはからひにちがひなかつた。

文子さんは昭和十一年秋の入店以来、今日までまる一年半といふもの、一日の欠勤はおろか一度の遅刻もなく、今では若い美しい食堂給仕監督として、×屋百貨店の名物になつてゐる。

『もう一年もはたらいたら、是非わたしがすばらしいお嫁さんの口をみつめてあげやう』

時々店へやつて来る天野氏は、文子さんをつかまへてはそんな冗談をいふのだが、

『いいえ、妹達をちやんと一人前にしてからでなけりや、お嫁さんになんかいかれませんわ』

と、文子さんはまだく十年ぐらゐはたらくつもりらしい。(をばり)

# 愛の學校

## 舌を出す少女

國史の時間だつた。

『……正成はどんなに残念だつたらう。だが弟の正季が、七度生れ變つて朝敵をほろぼさんといふと、正成はうれしげにうなづいて』

五年の受持ち沖先生は、もう腰が曲りかけて七十ぐらゐの老人に見えた。本當は五十を二つ三つでたばかりなのだ、永年の苦勞が、先生をそんな風にしてしまつたのである。すりきれたつめえりの服に、小使さんでもはかないやうなゴムの短ぐつをつつかけ、ニッケルの老眼鏡をかけてゐた。

そんな姿にあはず生徒を教へる先生のことばには、青年のやうな熱情があふれ



てゐた。

『……かうして正成は、つひに湊川で戦死したんぢや。正成の死をきいて、尊氏は非常によろこんだ。お前たちはこの尊氏をどう思ふ。後醍醐天皇の御恩もわすれて、朝廷にそむき、正成のやうな忠義な人を殺した尊氏をどう思ふか。りつばな日本人だと思ふか？』

ひとみをかゞやかしてゐた生徒達は

『ハイッ！』

『先生！ ハイ！』

と一せいに手をあげた。それをズーツとみまはしていつた先生の眼が、この時ふしぎさうに光つた。柿本ミサが珍らしく手をあげてゐる。いつもおしのやうに黙りこくつてゐる子が、けふは又どうした風の吹きまはしだらう？

『ハイ、柿本いつてみなさい！』

ミサはびつくりしたやうに立ち上つた。十三四の顔色のわるい子だ。しらみで

もわいてゐるやうな赤茶けたかみの毛、乞食のやうなひどい着物

『カラス部落！』

男生徒の列からあざわらつてゐるやうな聲がもれた。

ミサは赤くなつて、口の中になにかブツブツつぶやいた。

『もつと大きな聲でいはんか。尊氏をお前はどう思ふんぢや？』

『ひつ、ひつばたいちやいたいと思ひます』

『ひつばたく？ 尊氏をひつばたくのか！』

わーッと教室がわいた。

『これはゆくわいぢや。尊氏をひつばたくとはおもしろいことをいふのう。ハ、ハ、ハ、』

ミサは急に意地のわるい顔をして、先生の顔をにらみつけた。先生に笑はれたのを、ぶじよくされたとかんじたらしい。そのまゝ席をはなれて、スタ／＼教室を出ていつた。



『こら、こら、どこにいくんぢや！』  
呆氣にとられたやうに先生が叫んだ。

と、ふたゝび入口の戸をほそめにあけて、ミサのキラ／＼する眼が、中をのぞいた。そのまゝ入るのだらうと、先生はホツとして、

『先生にことわりなしに教室をでたりしていかんぢやないか。早く入んなさい』  
さういふ先生の顔を、氣味のわるいほどだまつてみつめてゐたミサは。急にペロリと赤い舌をのばして、ピシヤツと戸をしめた。わーツと笑聲があがつた。

『待て！ 待て！ こらッ、柿本！』

先生はあはてゝらうかに走りでた。みると校庭に通じる戸がすこしあいて、そこから灰のやうなこゆきが、ドン／＼ふきこんでゐる。

『可哀さうな子だ。そんなつもりで笑つたんぢやなかつたのになあ……』  
吹雪の中にうすれていくミサの後姿を、沖先生はかなしさうに見送つてゐた。

### カラス部落

札幌市街の東部をなされる豊平川。その雪にとぎれた河原に、むさくるしい小屋がゴチャ／＼とかたまつてゐた。街の人はそれをカラス部落と呼んでゐた。

にしんのでる三、四月頃になると、札幌には鳥がゐなくなる。ほうふな食物を求めて、地方のにしんれふばへいどうするのである。それと同じやうに、この部落の人達も、雪どけ時分になるとんでに小屋をひきはらつて、地方へ出稼ぎに行き十一月またこゝにまひ戻つてくる。そして移住組と定住組と半々ぐらゐの割合だつた。

沖先生が、この部落をおとづれたのは、柿本ミサが學校にこなくなつてから、三日目の夕方だつた。豊平川の兩がには、街の灯が寒さうにまたゝき、雪の上に立つた小屋だけが、黒々とくれのこつてゐた。名前にはきいてゐたが、先生がこの部落を見たのははじめてである。





出たのかね？」

『ぼけなすめ。學校なん

か誰がいくも

んかい。誰だ

つてい

つて

雪かき人夫、紙芝居や、くづ買ひ、いろいろなふうていの人達が、先生の姿をうさんくささうに見ながらとほりすぎた。一日の労働をへて、街から戻つてきたのである。そして、何よりも先生の心を強く打つたのは、その乞食のやうななりをして、そのへんに遊んでゐる多くの子供達であつた。

『柿本さんの家はどこだね？』

沖先生は、十四五の少年を呼びとめてきいた。眼のギロリとした、色の黒いきかなさうな少年だつた。

『ミサの家か。知るもんかい』

『そんな意地のわるいこといはんで、教へてください。たしかにここときいてきたんぢや』

『お前けいさつの小使だろ』

沖先生は思はず笑ひ出した。

『いや、わしは學校の先生ぢや。ほらこの通り本を持つてゐる。君はもう學校を



ねえや。なんだ、お前、先生か。きたねえ先生だなあ。ミサの家を教へてやるから五錢くれ』

先生は笑ひながら、白銅を一つだしてその少年にあたへた。名前は捨吉で、くづ買ひをして、病氣の母を養つてゐるのだと、少年はじまんさうに話した。

『これは先生さま、よくいらつしやいました。こんなむさくるしいところをまあ……』

日やとひをしてゐる柿本ミサの父親は、まだ仕事先から歸らず、母親がうすぐらい小屋の中から顔をだした。氣狂のやうに髪をぼう／＼のばした、四十ぐらひの女だつた。

『子供さん、病氣でもしてゐるのぢやないかと思つてきてみたんぢやが。』

『なんの、この通りピン／＼してをります。ミサは學校をやめさせました。』

母親のうしろにたつてミサは、おつと先生の方に眼を光らしてゐた。

『學校を、やめさせた？ どういふ理由ぢやね？』

『理由といつて別にありませんが、カラス部落の子供はカラス部落でけつこうでございますよ。ハイ、家のお父さん短氣なもんで、學校さだんぱんにいくといひましたが、やめさせたら文句はねえだらうと、ハイ……』

どうも様子が變なので、なほよくきゝただしてみると、ミサは、沖先生にカラス部落の子供といつてわらはれたからもう學校にいかないといひだしたらしい。

子供のいふことを、そのまゝ取りあげて、先生に一應の相談もなく、學校をひかした無智さ加減が、又しても沖先生に悲しい氣持を起させた。

『わしはそんなことをいつたおぼえはないが、それはそれとして、明日から學校によこして下さらんか』

さういつて、先生は、子供の教育はいかに大切であるかといふことを、母親にかんでふくめるやうにいつてきかしたが、

『わたしはハア無教育でなんにもわかんねえけれど、こら、ミサ、寒いから早く家に入んな。母さんもなんだかゾク／＼してきた。先生さま、まことにはや御足



勞でございました。

お茶もさしあげます、ハイ………」

この時、ビューンと飛んできた雪球が、パツと先生の鼻柱にあたつてくれた。

『アッ』

と老先生は眼鏡をとばして、よろめいた。顔を両手で、おほつてしばらくじつとしてゐた。すこしはなれた小屋のうしろから、わーッと歡聲があがつた。捨吉が意地のわるい顔をして、先生の方を見てゐた。

『この餓鬼どもはまあ、なんていたづらするんだか、ハ、ハ、ハ、』

ミサの母親は、大きな口をあけて笑つた。

『わしをこんなひどい目にあはしたのは誰ぢやね？』

先生はしづかな調子でできた。バラバラッと雀のやうに子供たちが散つた。

『おれだい。おれならどうしたんだい？』

捨吉が肩をそびやかして、先生の方に進んで来た。

『お、さつきの親孝行な少年だな』

先生の微笑を見て、捨吉は、びつくりしたやうに立ちどまつた。

『わたしの眼鏡がどこかへいつちまつた。ひとつさがしてくれんか。』

『そそんなもの知るもんか！』

さういひながらも捨吉は、そのへんをキョロ／＼見廻した。ミサはだまつて、

さつきから先生の様子をながめてゐたが、この時、下駄でグイと地べたをふみに

じるやうにして小屋の中に入つてしまつた。

『アッ、こゝにあらあ！』

捨吉が駆けよつて、雪の中から眼鏡をひろひあげた。玉はみじんにミサの下駄

でくだかれて、ニッケルのふちばかり残つてゐた。

『ミサの野郎だ！ 畜生、わざとやつたんだな。やい、ミサ、でてこい！』

捨吉は急におこりだして、ミサの小屋の戸をわれるやうにたたいた。それを沖

先生はしづかにとめた。



『いゝよ、いゝよ、間違つてやつたのぢや。柿本はそんなわるい子ぢやない。』

## 皆さんお目出たう

カラス部落の子供達を教育しようと、沖先生が決心されたのは、それからまもなくだつた。七つから十四五までの子供が、男女合せて四十名ばかりゐた。その中で、學校に行つてゐたのは、柿本ミサひとりだけだつたのである。自分の子供を人並に教育したいと思つてゐる親もゐるにはゐるが、貧しいのと住所がきまらないので、仕方なく家に遊ばせたり、行商にだしたりしてゐるのだつた。

幸ひ部落の世話役が、話のわかつた男で、先生のために、毎晩、自分の小屋を提供しようと申しでた。教科書その他の學用品は、先生が都合して、ある星の牙えた夜、貧しい開校式が行はれた。

世話役の家は、十疊ばかりの小屋だが、そこに入りきれないので、雪の上にござをしき、子供達はもちろん、親達もみんな列席した。式がすんでから、みかん

やせんべいが出るのだつた。親も子供も、そればかり待つてゐた。

アセチレンのあかりが、その人達の顔を青白く照しだしてゐた。

『皆さん、おめでたう。けふは皆さんにとつて、ほんたうによるこぼしい日ぢやわしは心からいひます。皆さん、おめでたう！』

しづかな、しかし熱のあふれた調子で、老先生は話しだした。

『皆さんはこれからの日本をしよつて立つ大切な人です。日本を立派な國にするには、皆さんが今うんと勉強せにやいかん。今、勉強をしておかないと、皆さんは大きくなつてから、悲しい、つらい、みじめな思ひをしなければならん。あゝ若い時に勉強しておくんだつたと、きつと思ふ時がくる……』

『へ、へ、へ、ちつとも思はねえな、そんなことあ』

みんなの背後から、酔つてゐるやうな聲で誰かわらつた。沖先生はかまはず續けていつた。

『それで今は誰も彼も勉強してゐる。日本の子供達ばかりぢやない。世界中の子



供がみんな一生懸命に勉強してゐる。自分の國をよくしたい、よその國にまけないやうにと誰も彼も一生懸命になつて勉強してゐる。考へてごらんさい。日本はいま夜だが、イギリスとか、ドイツ、フランスなどといふ國はちようどお日さんが上つたところですよ。さういふ國の子供達はみんな本の包みをかへて、あるひは一人で、あるひは二人で、あるひは群をなして、あるひは長い列をつくつてさまざまの國の言葉で話しながら、何百萬、何千萬といふ子供が、みんな學校へ行くのですよ。皆さんは不幸にして家が貧しい。それだつて、立派な國民ですぞ！ 名譽ある日本をこれからよくしなければならん、大事な役目があるので

！』  
『もう、いゝかげんにしろい、おやぢ、餓鬼どもにそんなこといつたつて何がわかるんだい！』

又誰かが叫んだ。

『お父さん、黙つてろい！』

捨吉がその方をふりむいてにらみつけた。

『恐れ多くも明治大帝には、教育勅語といふありがたい勅語を賜りました』  
一同は急にシーンと水を打つたやうにしづまりかへつた。

『みんな勉強をして、日本國民たる義務をつくせよとのありがたい仰せであります。この思召にそむいたら、皆さんは、日本人ではありません。それで今は誰も彼も勉強をしてゐる。嘸や盲の子供たちでさへも、読み書きをならつてゐますぞ若い職工さんは夜學に通つてゐる。せつせと働いた後で、眠い眼をこすりながら書物にむかふ。兵隊さんも教練の合ひまに勉強してゐる。みんな日本の國をよくしたいからです。立派な國民になりたいからです。皆さんもどうかしつかり勉強して下さい。アメリカ、イギリスの子供達に負けないやうに、一生懸命やりませう』

『負けるもんかい。毛唐なんかに！』

捨吉が興奮して叫んだ。子供たちはうれしさうに笑つた。なんにもわからない



チビ助までが一緒になつて。

『あたい、習はなくなつて知つてらあ、みかん早くくれないかなあ』  
うしろの方からミサがいつた。

捨 吉 の 涙

沖先生は毎晩、そのヨボ／＼した姿をカラス部落にあらはした。学校の授業が  
すんでから、つかれきつた身體をはこんでくるのだ。

子供たちは、先生のいふことなどはちつともき／＼はしなかつた。熱心に教へる  
先生の言葉を、ものゝ十分ときいてゐなかつた。

なにより先生をなやましたのは、たちの悪い子供達のいたづらだつた。中でも  
腕白大將の捨吉が一番ひどかつた。

ある時、授業がはじまるといふので、子供たちはみんな小屋に入つたが、捨吉  
ひとり、どうしたのか外に立つて、しきりに屋根の上をながめてゐた。

『捨吉、どうしたんじや』

小屋の中から先生がよんだ。

『なんだかへんなものが屋根にゐるんだ。なんだらうなあ？』

子供たちはゾロ／＼外に出て來た。

『どこにゐるんだ？ なにもをらんぢやないか』

と、先生はのび上つて屋根の上を見た。

『ゐるよ、ゐるよ、化物ぢやねえか』

『ようし、わしが見てやる。梯子を持つておいで』

捨吉はニヤ／＼しながら梯子をかついできた。

むろん口からでたらめのうそだが、先生は、わざと梯子にのぼつて行つた。

『捨吉又お前はうそをいつたな』

梯子の上から先生がいつた。

『さうかなあ。いまたしかに黒いもんがみえたんだが、先生、よく見ておくれ』

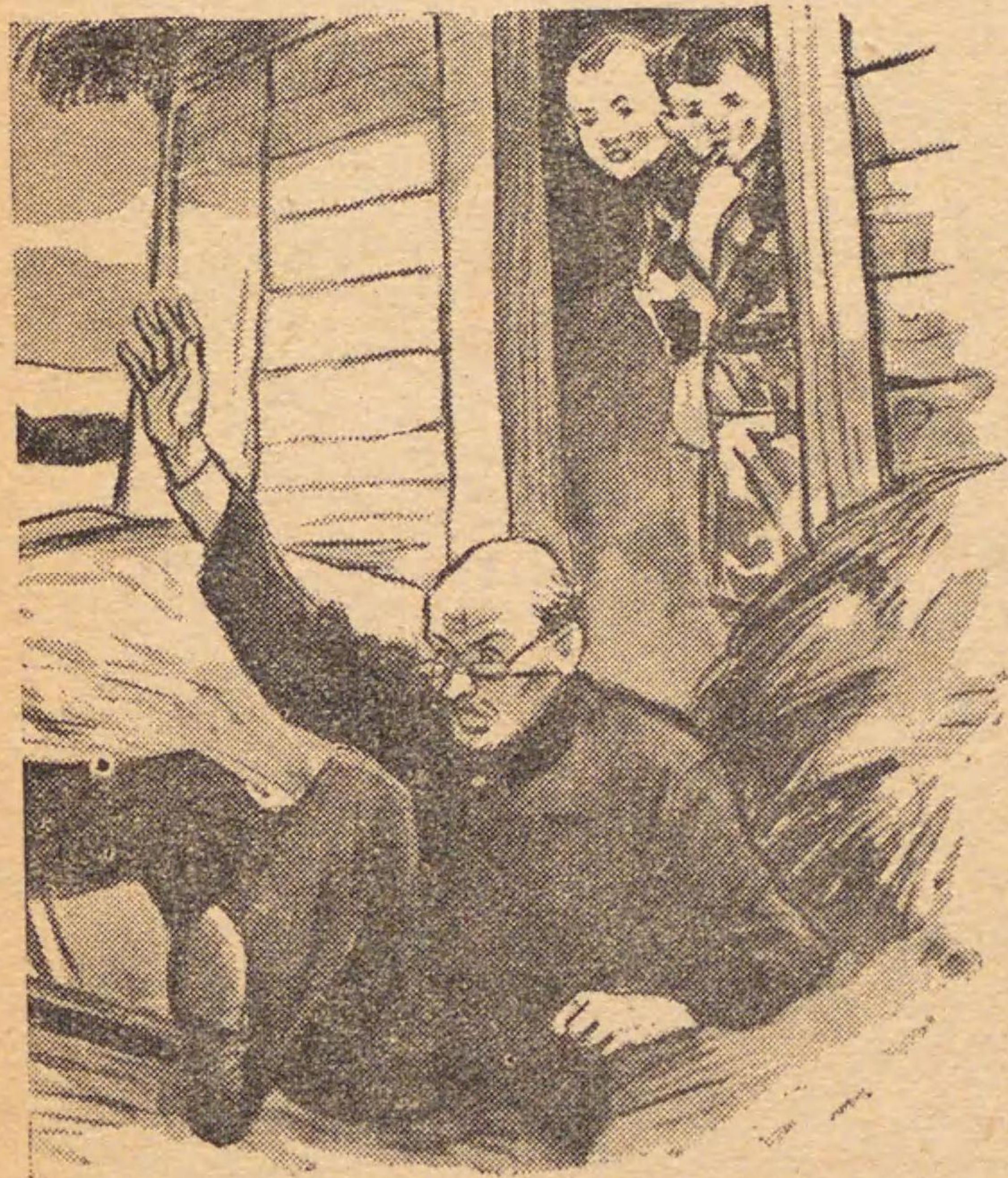


よ』  
先生のゆだんをみすまして、捨吉は、いきなり梯子を引き外した。ドスンと雪の上に投げだされた先生は、ひくいうめき聲を發して、起き上ることもできなかつた。

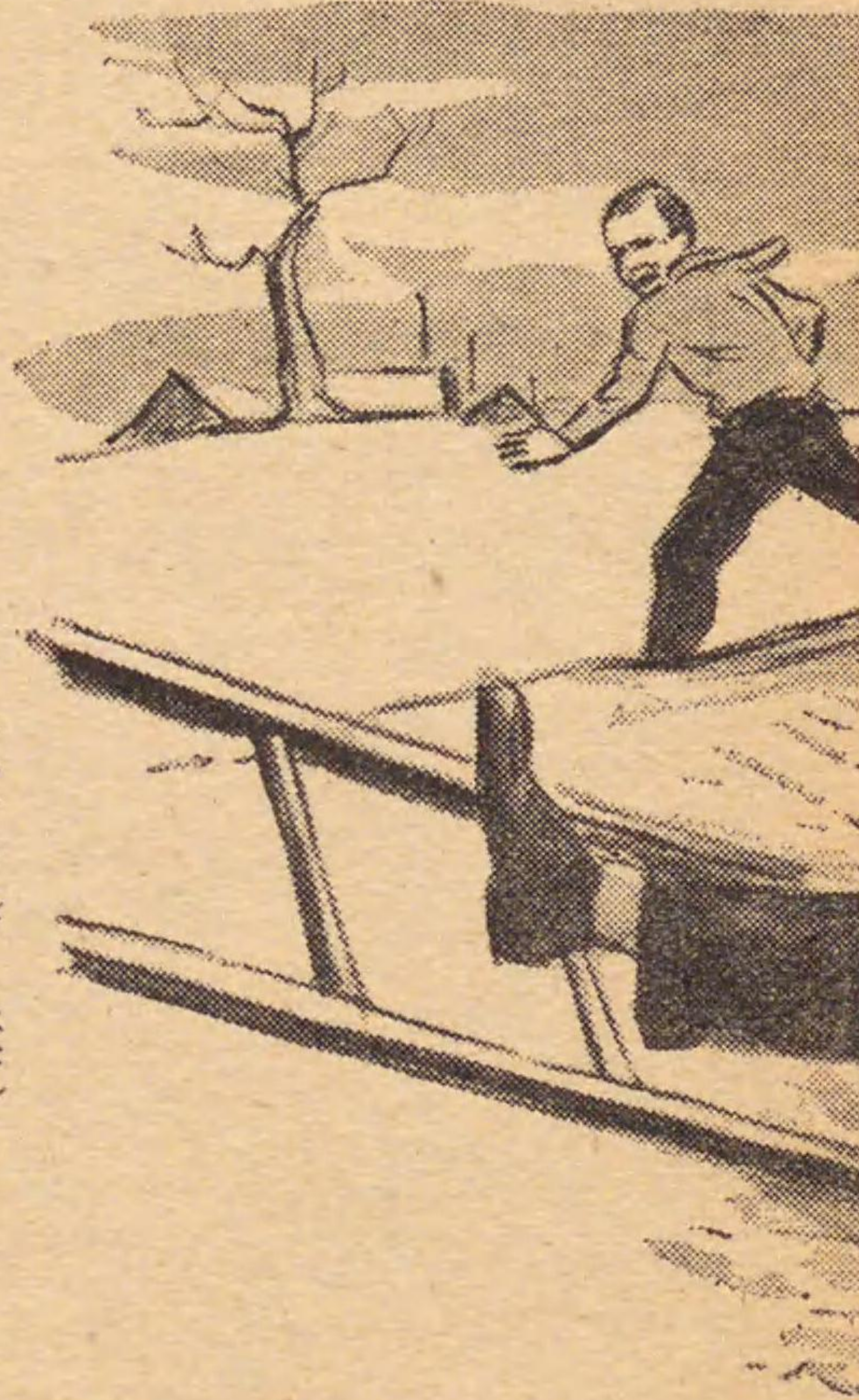
子供たちは心配になつて

みんな先生のまはりにつけよつた。捨吉はとつくの昔ににげだしてゐた

三、四日休んで、先生は又やつてきた。腕を繃帯でつるして、すこしちんばをひきながら、しかし、なにこともなかつたやうな顔を



して、子供達を見まはした  
『捨吉はどうしたかな？』  
先生は心配さうにきいた  
『先生に怪我さしたから、もう學校にこねえつていつてました』  
ひとりの子供が答へた。



『よし／＼、わしがよくいつてやらう。さあけふは、楠木正成の話をやらうかな  
湊川といふ所で戦死した、とても強い勇氣のある、そして忠義な武士ぢや……』  
すると、何と思つたか、ミサはプイと立ち上つて、小屋を出て行つた。捨吉も悪いが、しかし、たちの悪いことからいふと、ミサの方がすつとうはてだつた非常にひねくれてゐた。それは彼女がまだ學校にいつてゐる時、仲間からカラス部落々々といはれて、馬鹿にされたその反抗心からきてゐるらしかつた。



『お待ち、柿本』

ミサの後から、小屋をとびだした先生が、右手をのぼして、彼女の肩をつかまうとすると、ミサはふりむきさま、いきなり先生の中指にかみついた。

『あ！ 痛ッ……』

思はずひいた先生の指から、ポタ／＼血がこぼれ落ちた。と、この時、小屋のかげからいきなり黒い影がをどり出して、ミサの横面をパン／＼となぐりつけた捨吉だった。勉強なぞやめたいといひながら、先生がきたときくと、さすがに心配になつて、小屋の外からそつと授業の様子をのぞいてゐたのである。

『ミサ！ てめえ生意氣だぞ！ 女のくせになんでえ、いつかも先生の眼鏡をわざとこわしたりしやがつて！』

『これ、これ、お前は何故柿本をなぐつたのだ！』

ミサをかばふやうにして、先生がいつた。

捨吉は青白く興奮した顔を、キツと先生にむけた。

『悪いからなぐつたんだい！』

『悪いからなぐつた？ ふーむ、するとお前は悪いことをせんのか？』

左腕の繃帯をチラと上眼でみて、捨吉は面目なささうにうなだれた。

『捨吉、よくきけ。わしの左の腕はなほつても使ひものにならんさうぢや。しかし、わしは、決してお前を叱りやせん。お前は立派な子だ。わしはよく知つてゐる。お前はただ悪いこと、善いことの區別がつかんのぢや。お前は美しいりつばな心を持つてゐる。その心が大きく伸びていくのをわしは楽しみにしてゐる。わしの腕の一本や二本なんでもない』

捨吉は急に顔をおほつて、シク／＼泣きだした。

『先生、おらあ、おらあ悪いことをした。先生、その腕、ほんとになほらんのかい？』

『そんなことは心配せんでい。お前は今悪いことをしたといつた。それをきけば先生は充分ぢや。捨吉、お前は正直な、勇気のある人間だぞ。さあ、正成の話』



をしてやるから、みんなとおとなしく待つてなさい』

眼をこすりながら、捨吉は小屋に入った。

『柿本、お前はいま捨吉が泣いてゐたのを、どう思つたかね？』

先生はやさしい調子できいた。

ミサはツンと顔をあげて、

『捨吉は弱虫です。だから泣いたんです』

『弱虫だから泣いた？ 柿本、よく先生の眼をみなさい。お前はほんとうに心か

らさう思ふかね？』

先生はぢつとミサの眼をのぞきこんだ。

『さう思ふね、なんだい、あんなにくちなし』

クルリと身をひるがへして、ミサはバタバタと走り去つた。

### われらの先生を救へ

沖先生はたうとう病氣になられた。日頃あまり丈夫でないからだで、毎晩無理したのがいけなかつたのだ。風から肺炎に變じて、枕もあがらない重態だつた。

河原の子供たちは、はじめ先生の病氣を知らなかつた。どんな吹雪の日でも、休んだことのない先生が、バツタリこなくなつたので、どうしたのかしらとみんな額を集めてゐるところへ、元の學校へ様子をきゝに行つたミサが、眞蒼な顔をして歸つてきた。

『大へんだわ。先生、死ぬかもしれないんだつて』

『先生の家はどこだい？』

捨吉がかみつくやうにきいた。

『それがとても貧乏なのよ。こゝよりもつとひどいわ。先生はあたいたちのためにお金をみんなだしてたのよ。あたいたちを教へるやうになつてから、今の家にひつこしたんだつて。奥さんも誰もゐない家で寝てたわ。近所の人世話してのよ。あたいが行つたら、先生とても喜んでポロ／＼泣いてたわ。お前がきて



くれたのが、なにより嬉しいつて、あたいの手をとつて、泣いてるのよ。寝てると、どういふわけだか、学校の生徒よりお前たちのことばかり思ひだしてならないつて』

『先生は馬鹿だなあ！』

捨吉がくやしさに叫んだ。

『どうして病氣になつたのを、おれたちに知らせねえんだらうなあ。おい、おれはどんなことをしても、先生を助けるぞ。このまゝ死なしてたまるもんか！おれは早くえらくなつて、先生の喜ぶ顔がみてえんだ。それが今死んぢまつたら、くそ！ そんな馬鹿なことがあるかい。おれはどうしても助ける』

『あたいもさうだわ。先生はあたいたちの先生だわ』

ミサが叫んだ。わーッと子供たちの聲が河原に上つた。

捨吉は子供たちを全部集めて、五人くらゐづつにわけ、組々に指揮者をきめて納豆や東子の行商隊を組織した。先生の入院費をつくらうといふのだ。子供の

親達はもちろん、さうでない者もみんな賛成して、出来るかぎりの助力を子供達にちかつた。

『行商は明日の朝からにして、今夜は先生のお見舞だ。ちやんと列をつくつていかないと、先生に叱られるぞ』

『氣をつけッ！』

『前へ進め！』

わら靴をはいたの、頭巾だけかぶつたの、ボロ／＼のマント、穴のあいた赤い足袋——いろ／＼な子供たちの長い列が、行人の眼をひきながら、豊平川の長い橋をわたつて、北風にさからひながら街の方へ進んで行くのだつた。

愛 は 強 し



三人きやうだい

『生意氣おいひでないよ。お前がどんな人間だか、世間さまにきいてごらんさ  
いだ。』

蒼白い顔をして、正子が叫んだ。

『チエツ、世間がなんでえ、ひとりで稼いでると思つて、大きな面するねえ。』

『悪かつたわね。大きな顔されなくなつたら、姉さんの世話にならないでおく  
れ。』

『お、ならねえ！』

『健太！』

忍び泣いてゐた母が、煎餅蒲團から身を起して叫んだが、健太は振り向きもし  
ないで、

『こんな家に誰がゐてやるもんか！』

足音荒々しく出て行つた。

姉の正子は今年十九だつた。三年前、父が亡くなつてから、萬年筆工場に働い  
て、リウマチスで寝たつきりの母親と、二人の弟を養つてゐた。

『あの年頃で、白粉ひとつつけずに、なんといふ感心な娘だらう。』近所の評判だ  
これにひきかへ、弟の健太は十七にもなつて、毎日家にごろくしてゐる。しか  
し、これは健太ひとりの罪ではないやうだ。家が貧しいので、彼は小學校三年し  
かるつてゐない。商店などではかういふ子供を使ひたがらない。それで職人にな  
らうと大工、植木屋、洋服屋などに奉公したが、困つたことに、ひどく無器用な  
性質で、いくら眞面目に働いても、『間抜け！』『能なし野郎！』と罵られ、  
どこへ行つても永續しなかつた。

『健太は不良少年だ。あんな奴はしまひに刑務所行きだ。』

事情も知らずに、世間の人はいふのである。健太は悲しい、口惜しい。それば  
かりでなく、姉の正子まで一緒になつて、同じやうなことをいふかと思ふと、残